二十二　母を憶ふ（上）

斯く福間氏の信仰の徑路を辿つた予は、親といふ考へが一層新らしう心に浮ぶやうになつた。全體、それより前から親といふ觀念は予に取つて非常に深き印象を與へてゐたのである。之は全く故島田蕃根翁の御蔭で、今でも親を憶ふたびに蕃根翁を思ひ出し、蕃根翁の話を思ふ度に親を憶ふ心が切に感じられるのである。蕃根翁は、生前屢々私の經營してゐる同和學園を訪ねられて、色々有益な話をして下さつたのである。翁が常に口癖の樣に話された事柄は、廣島縣の木原松桂といふ人の孝心の厚かつたことである。翁がまだ弱年の頃、長州の吉田松陰先生

の所で『松桂紀行』といふ書物を見られた。之は松桂が母を尋ねる爲に辛苦艱難して諸處を探し歩いた時の紀行で、その孝心の深い模樣が紙面に溢れてゐるとの事である。此書は松陰先生が座右を離さず愛讀されたといふことで、蕃根翁も大に之に感じて居られた。翁は其後常に此話を人に語られて其孝心の深かつた事を賞揚せられてゐた。私も廣島縣であるから、自分の縣にも此樣な孝心深い人があつたかと思ふと何となく慕はしい感じが起るので、どうかしてその『松桂紀行』を得たいと探したけれども、遂に手に入らなかつた。處が偶々同縣人會合の席で此話をしたところが、ドクトル富士川游氏が、その紀行は確かに自分の處にあるやうに思ふが、又別に蒲生重章の『近生偉人

傳』の中にも詳しい事歴が載つてゐるとの事で、早速その偉人傳を借つて一讀した所が、成程松桂の孝心の迹が歴々として手に取るやうであつた。松陰先生の孝道も此の『松桂紀行』の影響を被つてゐられる事の尠少でないことを知つた。而して此傳を讀んだ私は、母に對する觀念が著しく強くなつて、遂に母の死せらるゝ迄何事も母の意に逆らふまい、維れ命、之れ從ふといふ決心を生ずるに至つたのである。

木原松桂は、檜山庄五郎の第四男であるが、後木原家を嗣いで其姓を名乘つたのである。松桂は至つて孝心が深かつたが、幼少の時母親は家出して所在不明となつたので非常に之を慕ひ遂に十四歳の時自ら行脚僧となつて諸國を遍歴して母を尋ねん

事を父に乞ふたが、父は容易に之を許さないので、止むを得ず醫師となつて後、四方を周遊して母を尋ねやうと決心して、三永村の藤伯恭といふ人に就て醫術を學ぶことにした。此時代の松桂の苦學勉勵は一通りでは無かつたので、夜分他の門生が寢に就いた後を見計ひ、師匠の秘方書を寫しては往々四更五更に至つたのである。斯くて寛政六年の春正月、鄕里に歸つて父の膝下に祝する事になつたが、此時彼は父に請ふて言ふには、自分の醫者となつたのは、一身の顯榮を計つたり、衣食の豐美を貪る爲では無い、諸國を遍歴して母の踪跡を搜し出さんと欲する故である。今私は年齡も稍長じたれば、どうぞ數ヶ月の暇を賜りたいと、荐りに父に哀願した。父も其決心の堅いのを見て

兄幸四郎と共に母を搜索する事を許した。松桂は大に喜んで兄と共に早速母の鄕里なる東野村に趣いて、母の平常の嗜好と習癖容貌等に就て審かに尋ね、先づ讃州丸龜高松邊を搜した。是は母が此地方を徘徊して居るといふ事が父の耳に入つてゐたからである。兩人は先づ金比羅へ參詣して心當りを索めたけれども遂に手を空しくして歸つた。父は松桂を慰めて、『汝は今より專ら醫術に志して復た母の事を念ふな、汝が乏しい路銀を以て行旅をすれば父は却つて之れが心配となる。且つ母は生死の程も知れぬ譯であるから、宜しく宿世の因緣と諦らめよ』と懇々と誨したので、松桂は悵然として是非なく復た三永村に往つて再び伯恭の下に醫學を研いた。爾來八ヶ年間は、少しも他を

顧みずに專心醫を勵んだ。此間師に代つて病家に趣いて謝禮を得れば、悉く之を師匠に預けて決して濫費せず、他日再び母を訪ねる折の旅費の備へとした。享和二年の正月は、又師匠と父とに暇乞して復び母を尋ねに出た。其時、竹原の賴春風の餞別の詩に、

廿年不相見、勵志未爲遲、唯在盡其職、此行無兩岐。

又某の詩に、

天地不偏立、二親何可虧、勉哉爲子職、此去莫遲々。

等があつた。そこで松桂は、母を尋ぬる記を作つて、之を諸國の神社佛閣の柱壁に貼つたり、或は之を諸國を行脚僧や四國西國の巡禮者に托して、自らも亦備中伊豫讃岐出雲の諸國を搜索

し、野に寢ね山に臥し、あらゆる艱苦を嘗めたのである。翌年の二月、父の命によつて郷里に歸つたが、文化二年の春頃には累りに貧苦に迫つた。偶々木原氏の後を繼ぐ事を勸むる者があつて、父も亦同意したので、遂に木原の姓を名乘り、義父の名を嗣いで松桂と云つた。實は今まで左仲と稱して居たのである

養家に入つても絶ねず母を懷ふて止まなかつたが、茲に不思議な事には、以前から折ふし妙な夢を見た。それは母が尼となつて黑衣をつけ、五六の尼僧と共に白砂翠松の間を過ぐる姿である。此夢は一度ならず二度ならず、度々之を見たので、心中に不審が解けず、之は一つ夢中に見た所の景色と同じ處を探し歩いたなら、屹度何かの手掛りがあらうと、色々詮議して、遂

に、伯耆國の渡村に至つた所が、其所の景色が曾て夢に見た所の景と符節を合した樣であつた。渡村は伯耆の米子から出雲の松江に至る渡口である。ところが翠松の間に一つの墓があつて之は渡村の長七といふ家の墓であつたから乃ち長七に就て色々と樣子を尋ねて見ると、自身の聞いた母の事と少しも違はない仔細を聞けば、母は諸國を遍歷して其處に來て、遂に再嫁をして長七を產んだのである。乃ち長七と松桂とは同母の兄弟であつたので、互に相抱いて感極まつて涕泣した。所が同村に忠七といふ七十有餘の老人が居て、長七の母の事に就て詳しく知つて居るといふ事であるから、尙ほ其人に面會して尋ねて見るとその言ふ所によれば、長七の母は非常に馬を恐れて、常に駿馬

は恐るべしと言つて居つた相である。それは母の若い時、親族に馬に蹶られて無殘の最後を遂げた人があつた。その死狀が如何にも無慘であつたから、遂に西國の神佛を巡拜して之を弔はんが爲に家出して、最後に此地へ來たのである。が松桂の親族に斯る慘死者があつたかと尋ねられた。是に於て、松桂はまた疑ひ無き能はずであつた。自分はまだ一度も母の馬嫌いであつたことを聞いたことが無い。又親類の中に馬の爲に蹶り殺された人のあつたことも聞かない。若し老人の言を眞とすれば、長七の母と自分の母とは別人かも知れない。かく考へた彼は、急に失望の淵に沈められた心地がして、長七に向つてその粗忽を謝した。

然るに長七は、却つて老人の言を以て老耄の痴言であるとして、松桂と同母兄弟であることを疑はない。且つ言ふのには、昔唐の王少玄といふ人があつて、其父が亂兵の爲に殺されたが其時十歳の少玄は哀泣措く能はずで、如何にもして屍を求めんとしたが、白骨雜然と入り交つて何れを夫れと分つことが出來なかつた。時に人あつて、汝の血を骨に注げば、その血の染みたるものは父の骨であると敎へたので、少玄は大に喜んで之を試みたところが直に之を區別する事が出來たといふ話がある。今試みに墓を掘つて兄の血を注いだなら眞否は立所に分るであらうと言ふたので、早速大祥寺と言ふ寺に詣つて住僧白元に事の次第を話して、墓を掘る事を乞ふた。白元は快よく之を承諾

して呉れたので、直ちに墓を掘り始めた。然るに松桂密かに思ふやう、若し他人の骨でも我が血の染むことがあつたならば、未だ俄かにその實否を正す譯に行かぬと考へたので、又僧に乞ふて他に一つ罪人の墓を發いて白骨を得、針を以て右手を刺し鮮血迸り出づるところをその顱骨に承けた。暫らくして血の乾くを俟つて之を洗へば、血は少しも滲透せずに白骨は元の如くであつた。是に於て、更に母の墓を發りて遺骨を取り出し左手を刺して之を試みたところが、鮮血が能く骨に滲み込んで珊瑚の樣であつた。そこで水を酌んで骨を清めたけれど、血が滲透して紅の色が少しも褪めない、そこで松桂は同血分身の理を知つて嬉し泣きに泣き崩れた。そこに見て居た人達も感泣して、

相共に松桂を助けて遺骨を修めて大に佛事を行ふた。此事が遠近に傳はつて、或は弔ひ或は賀するものが踵を接して集つた。後松桂は遺骨を奉じて國に歸り、東野村に至つて馬の一件を尋ねた所が、成程、以前に三藏といふ下男が居つて、馬の爲めに殺された事がある。之を母が見て非常に氣を痛めて家出したのであると言ふ事が分つたので、嚮きに忠七老人の言つた事も明白になつたといふ。松桂はその後祖父の墓をも尋ね出したといふことである。

二十三　母を憶ふ（下）

以上は松桂の略傳であるが私は此傳記を讀んで非常に我身の不孝を愧ぢたのである。世には斯くまでも孝心の篤い人がある に反し、自分を省みれば實に慚愧に堪へないのである。

私は九歳の時に鄕里を出て、修學の爲に前後三十箇年の間、別段母を大切にするといふ觀念も無く、只自分の目的の爲に勉强するといふ事より外に何の考へも無かつたのである。その私が、數年前蕃根翁より木原氏の美談を聽いて、飜然として我に歸り、嗟予は何たる不孝兒であらう、幼い時から兩親を見捨て殆んど之を省る事もせず、只自分といふ考へばかりに支配せら

れてゐたとは餘りに罪深い仕方であつた。今兩親が無事である 內に孝養を竭さなかつたならば、死なれて後悔んでも詮がない あゝ私は過つてゐた。とは實に當時の感想であつた。其頃は丁 度例の高輪佛敎大學の閉校問題で矢釜敷かつた時代で、私も奪 度牒の處分を受けた頃でありましたが、國元に居た母が非常に 心配して、かうなつては御本山には益々緣が遠くなり、寺との 關係も薄くなるから、どうか國元との關係をつけさせやうと考 へて遂に私に妻を娶らすといふことを決心して、國元から娘を 連れて上つて來られた。私は同和學園を經營する上にも又自分 の境遇から言ふても、妻を迎へるなぞとは思ひも寄らぬこと、 否寧ろ無妻主義であつたから、實は非常に當惑した。併し兎に

角、母は熱心に彼女を妻にせよと迫るので、どうしたものかと色々友人にも相談したが、結局母の命に從ふことになつたのであるそれは乃ち彼の松桂が母を憶ふの至情が、暗々裡に私の胸底を刺戟して止まなかつたからであつた。爾來母の命といふ事は、常に私の腦裏に强い印象を與ふるに至つたと同時に、私は郷里に健在なる、父親を省するの念が勃然とし禁ずる事が出來ぬやうになつた。近來夏期休暇には必ず歸國して父母を省みることに決定したのである。

其後私は、妻と共に同和學園の經營に非常に苦心したが、四十年の春頃は最も經營困難を訴へた時であつた。丁度其際福間久米吉氏が不治の難症に臥せられた時で、私は一週に一二度必

ず訪問する事に約束して居つたのである。ところが多くの友人は私に忠告して、『そんな事よりも、誰か他の人々と共に學園の發達を謀る方法を講じてはどうか。』と親切に言つて下さつた方もあつた。中には赤裸々に、『一人の布敎の爲に骨を折るよりも、多數を相手として話をする方が善いでは無いか』と言つて下さつた方もあつた。かくして私は苦境と闘つて來たが、幸に四十年の十月頃になつて福間氏の獲信の事實を見るに至つて一年間の苦節が全然徒勞でなかつた事を深く喜ばして頂いた。ところがその爲、福間家とは益々關係が深くなつて、主人の往生せられた時の葬儀まで私が營むやうになり、引續いて遺骨を侍して神戸廣島までもまゐるやうになりました。私は葬儀後は

自分の仕事もあるので、神戸行も廣島行もお斷りする考へであつたが、長子甲松君が、『母が寂しく感じますから、是非行つて下さい。』『母が愚痴が起るといけないから是非一所に來て下さい』と、荐りに言はるゝので、此『母が』と言ふ一言に對して、どうも拒む事が出來なかつたから、遂に甲松君の孝心に動かされて、神戸廣島へ下りました。丁度廣島へ下つた日が四月五日であつたが、國の樣子を聞けば意外にも私の母が廣島の病院に入院してゐるといふことであるから、福間家には知らせずに倉皇母を見舞ひました。母は元來氣の勝つた方であるから、少々の病氣位では私共に樣子を知らせるやうなことはない。然るに福間氏の用を帶びて西下した私が、偶然母の病氣を見舞は

して貰つたのは如何にも不思議に思はれる。甲松君が『母が、母が』と言はるゝ聲に後髪引かるゝ思ひして拒み兼ねて下つた私が計らずも自分の母を見舞ふ機會を與へられたと言ふのは、決して偶然の出來事とは思はれないのであつた。

翌日、福間氏の追弔會も濟んで、同行の泉君が東都へ還らるゝのを途に送つて病院に趣いた。その際妻に對して、母の病氣の爲め歸京の後れる事を傳言したのを、泉氏が福間氏の家族へも物語られたので、私の母の病氣といふ事を一同が知られたさうであつた。福間家の方々が神戸へ歸られてから、私は一人止まつて母の病床に侍して看護することになつた。母は別段に病氣が重くもないから、十日も早く東京へ歸れと毎日のやうに言

はれるので、私も氣懸りではあるが、私がゐた所でろくに介抱も行屆かぬから、寧ろ妻と交代して、彼女を歸したなら母も氣に入るからその方が却つて善からうと、ふと氣付いたから、十二日の瀘車で廣島を出發したのであつた。車中色々と母の事を思ひ出してどうも心配でならない。せめてはこのまゝで母に對する孝養が盡くせる道は無からうかと案じたが、矢張り念佛に如くものはないと氣付いてお念佛を稱へてゐた。その時不圖、

『親鸞は父母孝養の爲め一遍にても念佛申したること候はず』

との『歎異鈔』の御文を思ひ浮べて、我は佛に救はれ、佛になつて後親をも救ふべきであつた。親に盡さんが爲の念佛は自力の計らひであつた。何事も佛智の御計らひに任すべきであつた

と、始めて我れに歸らして貰ひ、感謝の稱名を禁じ得なかつたのでした。

古の聖は、『ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば、父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ』と言はれたが、あらゆる人が前生の父母であつたかも知れない。然らば東都に預つてゐる學生達も、前生前々生には如何なる深い關係があつたかも知れない。然らば私が彼等に盡すのも亦私の報恩行であると、漸く思ひ直して行くうちに瀘車は神戸に着いた。早速福間家に趣いたところが、夫人がいたく悲痛に沈んでゐられた際であつたから、色々御法義上の話をして喜ばして貰つたが、私は直ぐに東京に歸るつもりでゐると、甲松君は切に止めて、序に十七日まで居つて呉れ、さう

すれば母も大變に喜ぶからと言はるゝので、又母といふ念に引かれて遂に十七日まで留ることとした。此日は始めての命日であるから、家内の人々と一家團欒して御法義を喜んだ。さて愈々十七日もすんだから出發しやうとすると、今度は、二十日が三十五日であるからそれまで是非居つて呉れよといふ頼みで、又お母さんといふ聲に引かれて、遂に二十日まで引き止められて、其晩神戸を出發して歸京したのであつた　歸京後早速妻を國に還へして、私は留守中の整理をして居たのであつた。

丁度五月の十九日、文學士平川泉吉君と木原松桂の話をしてゐる所へ、電報で母の危篤を報じて來たので直に國に歸つて母を見舞ふた。病症は胃癌と子宮癌とで餘程重症であるから長く

は持てまいとの醫者の言葉を聞いて非常に失望したが、然し其の時母が、如來大悲の攝取光益の中に在つて、念佛相續し乍ら大病を忘れてゐる有樣を見て又大いに慰める所があつた。實に如來のお慈悲を喜ぶのが唯一の頼みであり又力である。一滴の水も最早通ずる事が出來なくなつた時は、念佛より外に通ずるものは無いのである。其の時母は福間氏の獲信の事など他より聞いて、それを緣としては如來のお慈悲を感じ非常に喜んでゐるやうであつた。私も子供の時から今日迄で大恩ある母に對して少しも滿足を與ふることが出來なかつたのであるが、此福間氏の入信の一事が母に對する最後の何よりの土産であつたことを感じた。

かくて母は遂に、五月二十九日に往生の素懷を遂げた、嗟、三十餘年の間私を撫育して下さつた母は遂に彼土へ趣かれたのである。若し之れが永遠に再會の期がないとすれば、どう考へても諦らめはつかないのである。一度別れた母に再び彼土で會ふ事が出來るとは眞に難有いことではないか。而して今迄漠としてゐたお淨土が明かに近く私の眼に映ずるやうな心地がして彼處にて我母が待つて呼んで下さるやうに感じられて、私は一刻も早く彼土に參り度いやうな思も起つて、全く淨土觀が一變したのである。併し、私は、母なき孤兒となつた後、退いて考ふれば、松桂が二十有餘年を費して母を求めたその眞情が、今に至つて明瞭になつて來たのである。希くば、此の母を思ふ心

を移して彌陀を念じ、母によつて示されたる警策を無意義に終らしめないやうにしたいものである。我等愚鈍の輩は、親の慈悲を通じて如來大悲のやるせない御心を知らせて貰ふのである

子の母をおもふがごとくに、　衆生佛を憶すれば、
現前當來とほからず、　如來を拜見うたがはず。

二十四　親の恩（上）

母を失ふてから、折々緣に觸れては、大藏經中、『父母恩重經』『父母恩難報經』『地藏本願經』『五母子經』『佛昇忉利天爲母說法經』『觀無量壽經』等の、親子の因緣の厚き事と、孝道の竭すべき事を說示せられてある經典を拜讀して、私が今迄親を念ふことの淺くして盡くすべき孝道の履めなかつた事を慚ぢ、自ら我が不孝の罪を責めて、深く衷心に懺悔した事であつた。

親子の道に就ては、儒敎其他の敎にも細かく說かれてあるが凡ての道の源は孝道を以て始めとする事は略ぼ一致するやうに

思はれる。釋尊は初め『華嚴經』を說法なされた時、菩提樹下に毘盧舍那佛眞身の形を示現して、菩薩大戒を敎へ給ふのに孝順父母の要道を以て諸戒の根本となされた。それより五十餘會の說法中にて孝道を說かれた事は幾度なるを知らない。其最後の『涅槃經』御說法の時には、應化身を示現して父母の恩の深重なる事を示されて御入滅なされたのである。成等正覺の曉から入大涅槃の夕べまで、父母に孝養すべきことの御垂訓は、浩澣なる大藏經典に終始一貫して違はない所である。

『佛說父母恩重經』に、

人の生れて世にある、父母を親とす。父に非れば生れず、母いまさずば育せず。是を以て母胎に寄托して懷娠すること十

月、歳滿ち月充ちて憂愁して俱に啼く。生るれば父母養育し闌車に臥着せしむ。父母懷抱し、和々として聲を弄するに、笑を含めども未だ語はず。飢時には食を求め、母に非ざれば哺せず。渴く時には飲をもとめ、母に非ざれば乳せず。母飢ゑたる時も、苦を呑んで甘を吐き、乾けるを與へて母は濕りたるに就く。父に非れば養はず。慈母子を養ふに、十指の爪中には子の不淨を食む。計るに、母の乳を飲むこと、各八斛四斗、母の恩を計論するに昊天極罔。嗚呼慈母の恩、如何が報ずべき。若し孝順の子有つて、能く父母の爲に福を作して經を造る。或は七月十五日僧自恣日を以て能く佛盤及盂蘭盆を造り、佛及僧に献ずれば、果を得ること無量にして能く父

母の恩を報ず。若し人あり、此經を書寫し流布し人に施し受持し讀誦せしむれば、是の人は能く父母の恩を報ず。母は兒を見て歡び、兒は母を見て喜ぶ。情恩の悲、親愛の慈、重きこと之に過ぎたるはなし。偈を以て讃して云く、哀々父母我を生んで劬勞す。此恩を報せんとするに、昊天報じ難し。と示して、最後に、懷擔守護の恩、臨產受苦の恩、生子妄憂の恩、嚥苦吐甘の恩、廻乾就濕の恩、乳哺養育の恩、洗濯不淨の恩、爲造惡業の恩、遠行憶念の恩、究竟憐愍の恩の十種の恩が擧げてある。又『佛說父母恩難報經』には、此の宏大なる父母の恩の報じ難き事を說き、勇猛精進に其道の爲に務めよと戒められてある。

右肩に父を負ひ、左肩に母を負ひ、千年を經歷して正に便利を背上に爲さしめて、父母を怨むことなきも、此子猶ほ父母の恩を報ずるに足らず。

と說き、『心地觀經』には、

若し善男子善女人、父母の恩を報ずる爲に、一切に於て每日三時、自身の肉を割いて以て父母を養ふに一日の恩を報ずること能はず。

と說いてある。

上の如き孝道に關する二三の經典を拜讀しても、如何に釋尊が孝道に重きを置かれたかを知る事が出來る。殊に釋尊が正覺を遂げられた後七日を經て、亡き母君のおはす忉利天宮に昇り

四月十五日より七月十五日まで九十日間、母君の爲に說法を聞かせられたのが彼の『佛昇忉利天爲母說法經』である。後代になつて行ふ所の一夏九十日の安居は此說法が起源であるその時釋尊は、地藏菩薩を紹介せられた。此の地藏菩薩が一切衆生の爲めに大願を建て、成佛せずして恒に六道に在つて衆生化益に怠るまいと誓はれたは、菩薩が慈母に別れ、悲みのあまり、再び親に遇いたいとの至情から、家財一切を捨て、三寶に供養し諸處を流浪し給ふのである。所がその至心至孝が屆いて母の住所もわかり、自分が佛を信じて供養した善根力により、母は遂に惡趣を逃れて佛國に生れる事になつたので、其の後、一切衆生を救濟しやうといふ大願心を立て、盡未來際を經ても成佛す

まいと決心せられたのである。此事を詳しく說かれたのが『地藏本願經』である。目連尊者も、自分の通力で亡き母の住處を尋ねられ、母が生前の邪見慳貪の報ゐによつて餓鬼道の苦患を受けて居らるゝその悲慘な有樣を見て、釋尊の前に往いて母を救濟する道を尋ねられた。そこで釋尊は、罪の重い汝の母に惡趣で遇ふには他に道はない。が然し七月十五日は三世諸佛の自恣日であるから、此日に一切諸佛を請じ、汝母に代つて母の罪を懺悔して廻り、猶ほ諸佛に厚く供養せよ。さうすればその功德によつて汝の母は餓鬼道を遁れるのみならず、七生の先きの父母まで終に人天に生るゝことが出來ると說かれたので、尊者は釋尊の命のまゝに其を實行せられ、終に母を救ふて佛果を得

せしめた。此の事蹟を說かれたのが『盂蘭盆經』であるといふことである。

事があまり神秘的なので信ぜられぬと言ふ人があるかも知れぬが、釋尊が、孝道を懇切に吾等に垂示せられたものだと言ふことは誰でも肯づくに躊躇しないであらう。經典中の地藏菩薩の本願や、目連尊者の因緣は、要するに此の孝道を明かに敎訓せられたものといふより外はないのである。されば釋尊御一代の經典中に顯はれた親子の因緣の深厚なことを一々深く味はして頂げば、釋尊が如何に孝道と言ふことに重きを置かせられたかゞ解るのである。而して、此等の諸經を拜讀して、次に『觀無量壽經』を拜讀した予は、更に一種の妙感に打たれれのであ

る。

此の經典の說相は、ある印度の王宮王舍城內に起つた一大悲劇であつて、國の皇太子阿闍世が父の頻婆娑羅王を迫害して終に死に至らしめ、且つ母の韋提希夫人をも七重の牢獄に幽閉したといふ、親子の間に於てあり得べからざる事柄である。親鸞聖人は、『和讃』に、

阿闍世王は瞋怒して、　我母是賊としめしてぞ、
無道に母を害せんと、　つるぎをぬきてむかひける。
耆婆月光ねんごろに、　是旃陀羅とはぢしめて、
不宜住此と奏してぞ、　闍王の逆心いさめける。
耆婆大臣おさへてぞ、　劫行而退せしめつゝ、

闍王つるぎをすてしめて、　韋提をみやに禁じける。
彌陀釋迦方便して、　阿難目連富樓那韋提、
達多闍王頻婆娑羅、　耆婆月光行雨等、
大聖おの〳〵もろともに、　凡愚底下のつみびとを、
惡逆もらさぬ誓願に、　方便引入せしめけり。

と詠ませ給ふてある。

韋提希夫人は、現在我が生みの子の阿闍世からこの虐待を受け、失望し落膽し、悲泣雨涙して遙かに釋尊に救ひの道を請はれた。釋尊は夫人の請願を聞召して、早速御說法遊ばされた。其時、最初に父母に孝養し師長に奉侍する此れが過去未來現在の三世諸佛の淨業の正因であると說かれ、夫れより定散二善、

三福九品と說き終らせられた。處が此の孝養父母の御說法は、我子の不孝から悲慘の逆境に悶ゑて居る夫人には、實に多大の感動を起さしめたのである。說法が終つて佛の救濟にあづかつて安心決定した夫人は、佛恩を厚く感謝すると共に、不孝な阿闍世を恨むどころか、却つて之に慈愛を垂れ、後に阿闍世に改悔せしめて佛法に歸入せしむるに至らしめた。其の夫人の慈愛深い親心の難有さを、星霜をふる數千年後の予がしみ〳〵と偲ばせて頂くのみで無く、此の悲劇が底下の凡愚を救濟の門に導く爲の釋迦彌陀二尊の御方便であつたことを夫人が感じたと同じく我等も感せさせて頂く事の出來た予は、親の尊い慈愛から更に進んで佛陀無限の大悲を味はして頂いたのである。

二十五　親の恩（下）

前のやうな親子の因緣の厚いことゝ孝道の竭さねばならぬといふ事を說かせられた經典と、今の『觀無量壽經』のやうな、親子の諍ひからあさましい大悲劇の演せられた經典とを對照して拜讀すれば、釋尊が吾々に向つて慇ろに垂れさせ給ふた御敎訓を感謝せざるを得ないのである。實に人生は親子の因緣ほど深く厚いものはない。故に親は子にたより子は親にすがりて互に溫かい心情を通はしてこそ、始めて人生に於ける最大幸福は得られるのである。

初め阿闍世が惡臣の唆かしを妄りに採用して、天地に容れら

れざる大逆無道を敢て遂行したが、後に前非を悔ゐて本心に立ち歸ると同時に、良心の苛責からして全身に無數の臭瘡ができ悲痛懊惱した。それを聞き傳へた母の韋提希夫人は憐憫の情やる方なく、いろ〳〵藥を塗つて偏へに快復を祈られたけれど、瘡は益々增加し痛みは愈々募つて行くばかりで、阿闍世は精神上の惱みと肉體上の痛みとで輾轉反側屢々悶絕した。

其時、日月稱といふ大臣が阿闍世に見ゐて、『大王よ、大王は今顏色愁悴して居給ふが、其は心の惱みの爲であるかまた身の痛みの爲であるか』と伺ふと、王は、『我は心身共に痛まずには居られない。我は罪の無い父王を無道に逆害した。こんな逆罪を犯したものは、未來無量無邊阿僧祇の間苦しめられると

聞く、我は苦果を受けるのだと思ふと身心共に痛まずには居られないのである』と答へられた。すると大臣は重ねて、『大王愁苦し給ふな。若し愁苦すれば愁苦の增長すること、恰も人が眠りを好めば眠氣を增し、婬酒に耽ればその想念が愈々增長するやうなものであるから、決して愁苦し給ふな』と諫めて退いた。次に藏德といふ大臣は王に向つて、『大臣よ、未來の苦果を心配して怖れ給ふな。法には出家の法と王法とあつて、出家の法では小虫を殺すも罪となるが、王法では決して罪とはならない。迦羅々虫は母の腹を破つて生れると聞くが、罪を得たといふ事は聞かない。大王が父王を弑して王位に昇るのが罪とならないのは、これと全く同じことである』と慰めた。其次には

實德といふ臣が王に見ゐて、『大王よ、一切衆生は皆業緣によつて生死界に流轉して居るのである。今先王には殺さる可き業緣があつたから大王の手にかゝつて殺され給ふたのである。是れ業緣の然らしむる所で大王の咎では無い。大王よ願はくば意を寬かにして愁に沈み給ふな』と申上げた。

斯の如くにして多くの臣下のものどもは入り替り立ち替つて種々に王を慰藉したけれども、王は是等の言では身心の苦悶は除く事は出來なかつたのである。其時耆婆といふ大醫があつたが、王の所に詣つて申すに、『大王奚んぞ眠ることを得んや否や』と、王は偈を以て答へられた。『耆婆よ、我は正しき父王に惡逆を加へて身心の苦痛を得た。此の苦痛は一切の良醫、妙

藥、咒術等の力を以て治する事は出來ない。我は昔智者の言を聞いたのに、身口意の業淸淨ならざれば此人地獄に墜つといふことであるが、我は身口意の業悉く不淨にして罪惡のみを犯し殊に善良なる大王を弑した。我れは必定地獄に墮するならん。我れ此の苦果を憶ふて安穩を得るを得ず。耆婆よ、速かに我れに法藥を施して身心の痛苦を治せよ』と、耆婆は對へて、『善い哉〳〵。大王は罪を爲すと雖も心に慚愧を抱いてゐられる。諸佛世尊は慚愧は二つの白法であつてよく衆生を救ふと說かれた。慚はみづから罪を造らず。愧は他を敎へてなさしめず。慚は內に自ら羞恥し、愧は發露して人に向つて恥づ。慚は人にはぢ愧は天にはづ。慚愧ある故に父母師長を敬ふと說かせ給ふ』

と申上げて、更に今大王の身心の苦痛を治する名醫は他には無い。獨り釋尊のみおはして、よく一切衆生を一子の如く憐愍して救濟の御手を垂れさせ給ふと奏し奉つた。其時阿闍世王は聞くともなしに耳を傾くれば、空中に聲あつて、『汝速かに佛のみ許に參ずべし。釋尊を除いては、他に汝が身心の苦痛を救ふものなし。我れ汝を憐むが故に敢て來りて汝を勸め導くなり』といふ聲が聞えた。そこで阿闍世王は恐怖の念に打たれて身體もわな〳〵と慄ひ出したが、果して誰がこんな事を言ふのであらうかと、懼る〳〵空を仰ぐと、再び空中に聲あつて、『我れは汝の父頻婆娑羅なり。早く耆婆の勸めに從ふて釋尊の救濟を仰ぐべし。決して他の臣下の言に從ふ勿れ』と告げられたので

阿闍世は驚愕に心も身に添はず、身の瘡は益々痛んで臭穢を發し、心中の懊惱は絶頂に達した。爰に於て阿闍世王はつく〴〵自己の罪業の深重な事を自覺すると共に、遂に佛陀大悲の救濟を仰ぎ、精神上の惱みと肉體上の痛みとを救はれて眞實に慚愧感謝の念に打たれたのである。此の虛空に父王の勸めを聞いたといふ事は、王自ら心中に浮んだ感想かも知れぬが、子の不孝を咎めずにかく苦惱せるを憐んだ父王の慈悲心が、今悔悟した王の胸底に顯現したのであらう。

上の如き事實を觀ずれば、眞實に親子の愛情の無限なことを味ふことが出來るではないか。吉田松陰先生が刑につかれた時の辭世に、

親を思ふ、心にまさる親心、今日のおとずれ何と聞くらん。

實にその通りである。如何なる場合にも親子の眞情は切斷する事は出來ないのである。此の如く親子の因緣が人生に於ては最も深く最も厚いものであるけれども、如來大悲の矜哀に比ぶれば實に比べものにはならないのである。如來は久遠劫の古より離るゝ事の出來ない深い契りを吾々衆生に結んで下されて居る。此を親鸞聖人は、『首楞嚴經』の意によつて『和讃』に

超日月光この身には、念佛三昧をしへしむ、
十方の如來は衆生を、一子の如く憐念す。

と詠ませられたのを思へば、吾等は如來の寵兒ではないか。如

來大悲の懷に抱かれて、限り無い深い惠みを受けて居るではないか。然し乍ら、如來のみ親の御慈悲はあまりに大きくあまりに高いので、却つて容易に味はして頂く事が出來ないのであつたが、今吾等も此人生に於ける親の子を思ふ慈悲を通じて久遠劫來より待ち給ふ眞實の親樣のお慈悲に氣附かして貰ふことが出來たのである。其のやるせない親樣のお慈悲は吾等の胸底に泌み渡つてゐる故、煩惱隨煩惱で滿ち充ちてゐる吾等も、最早如來の慈悲と離れる事が出來ないやうになつたのである。されば、諸佛も菩薩も皆阿彌陀如來の慈悲を知らせん爲に示現し給ふたので、和光同塵は結緣の始め、八相成道は利物の了りである。親鸞聖人の聖德太子を鑽仰せられた『和讃』に、

救世觀音大菩薩、聖德皇と示現して、
多々のごとくすてずして、阿摩の如くにそひたまふ。
無始よりこのかたこの世まで、聖德皇のあはれみに、
多々のごとくにそひたまひ、阿摩の如くにおはします。
大悲救世聖德皇、父のごとくにおはします、
大悲救世觀世音、母のごとくにおはします。
久遠劫よりこの世まで、あはれみます證(しるし)には、
佛智不思議につけしめて、善惡淨穢もなかりけり。
此の多々の如くといふは、矢張り父母の如くといふことで、佛の大慈悲を凡て父母のそれになぞらへて、常に我等にその憐愍の深き事を誨へて下されたのである。

信仰の妙趣　前田慧雲
善巧攝化　近角常觀
病牀の記を讀む　上杉文秀
福間久米吉氏獲信の餘瀝　多田鼎
葬儀の模範　泉道雄
『警世新報』

附錄

信仰の妙趣

前田慧雲

神戸の人で福間久米吉氏といふ實業家がある。此人が不幸にも昨年來大難病に罹つて日夜病苦に責めらるゝ身となり、今年の一月に第一回の手術を東京の根岸病院で受けた。癌の出來てゐる所の肉を抉り取るのであるから、施術の時の苦しさは非常なもので、遂に痛みの爲に全身の骨と身とが離れるやうに、それは〳〵非常な痛みであるさうで、本人の苦痛は勿論、傍に見

てゐる家族親族も共に身に痛みを覺ゐる心地がするさうである乃で本人も何とかして此の苦痛を去りたいものである。といふても肉體は既にさういふ大難症であるから、到底直ちに全快して其苦痛を忘れる事は覺束ない。けれども、せめて精神上よりして苦痛を去りたいものである。此外には最早如何とも致方が無い望が無い。今日まで拙者は有形上の贅澤は殆んど仕盡したから其點では今死んでも憾みは無いけれども、成程今となつて見ると精神上の苦痛は甚しいものである。是非宗教を聞いて見たいといふ樣になつて來た。佛教では此を逆緣といふてあるが逆緣にしろ何にしろ、福間氏は大不幸中の大幸福の關門に達し大安慰を得るの道に進んだのである。

そこで宗教の話をちよい〳〵聞くことになつたけれども、當初から實業家で金錢利益の事より外考へない人であるから、頭腦の中に金さへあれば世の中は安穩といふ考へが深く入り込んでゐて、直ちに佛教の妙味宗教の眞價を知ることが出來なかつた。初の程は病苦を忘れることが出來なかつたが、二度聞き三度聽き四度五度と重なるに隨つて、何時の間にやら骨と肉と離れる樣な苦痛も打忘れて、自ら過去の愚を顧み現在の苦痛を忘れて信仰の光明に微笑する身となつた。今迄は常にその苦痛の爲に惱され其苦しむ有樣は附添人も醫者も殆んど持て餘し、時々は、何故己れはこんな苦みを受けながら生きてゐらねばならぬのか、寧ろ死んだ方が餘程善いなど、人間業で出來ないこと

に愚痴我儘を言ふてゐた者が、光が暗を掻き消す如く何時の間にか慈悲の光明の爲に苦痛を拂ひ去つて、苦しい顔をしてゐた福間氏が佛のやうな顔になつて氣分も勝れて來たので、附添の人達も非常に驚いた。

先日私は、廣島からの請に應じて西下しやうと思つて新橋の停車場に滊車を待合はしてゐると、偶然福間氏の令息に出遇ふたので仔細を聞くと、『今一度親父に故郷を見せたいから、一週間ばかり病院から暇を貰ふて、唯今連れ歸る所である。』といはれるので、『それは丁度いゝ按梅である。』と同車しやうといふことになつたが、福間氏は大病人のことであるから寢臺車に乘られてゐた。そして私に言はれるには、『貴方が一處に乘つ

てゐるのは實に難有いが、口が叶はぬから言ひたいと思ふことを少い書いて見たから見て下さい。』とのことであつたから、そこで半紙二三枚に亘つて細々と認めてあるのを見ると、氣の毒とも憐れとも難有いとも何とも言ひ樣のない次第である。それには斯う書いてあつた。

『私は人間の快樂といふ快樂は總べて奪い去られて仕舞いました。食物の樂みも、眼や耳の樂みも其他凡べての樂みが、夢の樣に消えたばかりか、樂の代りに非常な苦を以て襲はれ、頭から足に至るまで皆苦のみとなり、人間として生きてゐる所詮が無いと思ひました。然るにお話を度々聞くにつけて、佛のお慈悲といふことを信じさして戴く身となつたので、先日第六回

の手術を受ける時にも、身を八つ割きにされる樣に痛むことは痛みましたが、然し己れの此の苦痛も佛樣と共に痛むのである佛樣は己れの爲に苦しんで下さるのであると思ひ出さして貰つたので、非常に愉快になつて、形容して見やうのない安樂を得たのみならず、唯今でもその事を思ふと、胸中に無量の歡喜が湧き妙味が生じて來ます。宗教の眞味を味はして戴くことの出來たのは實に自身の仕合せである。此の微妙甚深なる佛教の味は口や筆では何とも申樣が無い、何とかして世間の人にも此の妙味を頒ちたいものであります。故に病氣全快の上は、佛教は架空の談義では無い、荒唐無稽の說ではない、實に偉大なる力をお互に與へるものである、大安樂大幸福を事實に與へるもの

であるといふことを、全身を捧げて世の中に傳へたいと思ひます。』と、斯ういふ意味合のことを記るさるゝとして見れば、福問氏は實に幸福な人であると思ふ。『淨土を樂ふ行人は、病患を得て偏へに此を樂しむ』といふことがあるが、佛教の妙味を味ひ得たものは、善につけ惡につけ順につけ逆につけ、悠々と佛の大慈悲を歡喜るすことが出來るものである。

斯樣な次第であるから、家内の人々も目前に宗教の難有いことを見聞するので、何れも佛教の妙味を知つて來た。その苦しみ惱みを何とかして救ひたいと、銘々出來得る限りの力を盡して介抱し、金錢に飽かせて方法を考へたが、之と言ふべき苦しみを救ふべき方法もない。他人の身で代れるものなら代つても

見たいが、人間の力では到底何とも仕て見樣が無いことを泌々と感じてゐた矢先に、佛敎の話を聞いて見ると、何と名づくべきものであるかは知らないが、人間の力以上に偉大な力があつて其苦しみを拂ひ去つたのみならず、更に樂しみを持つて來たのであるから、如何にしても佛の慈悲を信せずにはゐられなくなつたであらう。家內の人々のみで無く、召使の者も、性急勝ちの主人が苦痛を忘れたのみならず、打つて變つた人となつたので、今更の如く佛の慈悲の偉大なるに驚嘆して非常な熱心な信者となつた。又福間氏が神戸での主治醫たる高橋醫學士も、東京から歸つた福間氏に接して、未だ診察せぬ前に、性急な氣六ヶ敷家の氏が生れ變つたやうな挨拶をするのが不審で堪らず

仔細を訊ねると右の次第であつたから、高橋氏も非常に喜んでゐられるといふ有樣である。

元來宗敎といふものは、事實の問題であつて、米の味は飯を食つて見ないと判らぬと同樣に、自分が信じて見ないことには眞の妙味が感ぜられるものでは無い。

世間一般の人が考へて居るやうに。先づ佛を拵へてから信じやう、慈悲といふものゝ科學的研究をしてから信じやう聞いてみやうといふやうなことは、毎日米の算段ばかりして、此米は何國の產であつて、何月何日に收穫したものである。其性質は何々で、之を分析すれば何々の滋養分がある。曰く何、曰く何といふやうな事ばかり詮義立してゐては、到底米の妙味を知る

事が出來ないのみならず餓死せねばならぬと等しく、宗教の眞味も詮義立ばかりしてゐては判るものではない。宗教の信仰の得られた時が卽ち佛である。其佛が活動すると大慈悲の光明が輝くのである。故に宗教の要は先づ信ずるといふことで無けはねばならぬ。哲學的の佛樣は難有いものでは無い。唯道理が判るのみで自身の上に偉大な力を與へるものではない。

世間一般の事でも、道理として判つてゐる丈けでは何の役にも立つものでは無い。倫理道德は斯々のものなり、斯々の理論なりといふだけを承知してゐるのでは、其人の道德行爲に少しも善良を加へないけれども、其道德なり倫理なりが自身の上に事實に感ぜられて來るといふと、其人の品格は改まり其行爲は善

に進むのである。故に宗教の事でも、理窟だけでは少しも微妙の力を顯さないけれども、自己の精神上に事實にする卽ち信仰して見ると、微妙甚深の功德利益を感受することが出來て、福間氏の如く其妙味に自己が救はれるのである。今日の物理でも化學でも、理窟として學者が議論してゐる間は、世界の文明に何等の貢献する所がないが、それを實用して器械なり工藝なりの上に其學說を事實にするといふと、初めて其處に偉大なる力となつて世上に効益を與ふるに至るのである。佛教の眞價は學問でも無ければ單に哲學の講義でも無い、宗教的の大威神力を顯すのであるから、信仰を以て第一とする次第である。

福間氏の如きも、佛の詮義立をしたり、慈悲の學說を研めや

うとしたならば、決して佛の慈悲を感ずることは出來なかつたに相違ない。故にお互に平素から宗教的の方面に向つて精神を養ひ立てゝ行くと、遂に精神上に事實となつて顯れて大安慰を得ることが出來るのであるから、病者と健康者の別ちなく、平生に法緣を結んで宗教に親しみ、自己の精神を養ふて行くことが最も肝要なことであると思ふ。

善巧攝化

近角常觀

今日の題は『善巧攝化』と出して置きました。凡そ人生上に於て、我々が日々に遭遇する色々の出來事は、皆我々一人一人の爲に催うして下さる佛の善巧方便のお力である。此點に氣付かせて貰ふことは信仰上甚だ大事であります。

之をお話するに就きて、恰も昨日一日間に我が出會せて頂いた事柄からお話申したら、能く解かるかと思ひます。年々信仰の機運の段々と熟して來るのは、實に有り難い處であるが、特にこの一二月の頃は毎年著しく盛んになる。考へて見ると、年

々さうなつてゐるのであります。今年も此頃は――特に先週の如きは信仰の話で以て、毎日々々引き續きに喜ばせて頂きました。特に昨日は、兼て『求道』の告白欄で紹介致して置きました福間氏が、第八回目の手術を受けらるゝといふので、其の前に一度信仰の話を聞き度いと言つて來られて、急に參つたのであります。實は其前夜に御子息から使がありまして、手紙で、明日は彌々八回目の大手術を受けるので甚だ心配をして居る。と申來されたので、私も非常に驚きまして、早速にお返事を上げて、『唯もう廣大なる佛の光明中に攝取せられて居る事故、何事も佛の惠みに安んじてやられたらよろしからう。人生は外のことはない、結局南無阿彌陀佛の一つである。夫につきて、

親鸞聖人のお歌にも、『戀しくば南無阿彌陀佛をとなふべし、我も六字のうちにこそ住め』とある。親鸞聖人一代の御教化も此の廣大の御惠み南無阿彌陀佛の外は無いのである。又蓮如上人のお歌にも、『形見には南無阿彌陀佛をのこしおく、亡からん後は誰も用ゐよ』とある。蓮如上人一代の御教化も、矢張り南無阿彌陀佛の一つである。他力信仰の味は唯是丈けである。故に何事が來らうとも、此の御惠み一つを喜んでゆかれたら宜しからう」と、取敢へず申上げて置いたのであつた。

昨朝になつて、是非に一度行つて見度く思ひましたが、生憎昨日は土曜日で、東京監獄に行かねばならぬ。のみならず、午後は九段の第二求道會である。猶ほ其間にも一箇所他に行く約

束がありましたので、已むを得ず心を殘して出かけました。順を追ふて申しますと、此前の講話にも申した如く、先日東京監獄の典獄のお娘子が亡くなられたので、先づ其方へ伺つて讀經を致しまして、夫から監獄へ參りました。處が宅から電話で、今福間氏から電報で急に來て呉れといつて來たと知らせましたので、私は急に福間氏の方を伺つたのであります。

福間氏の事に就きては、既に度々申しましたから、今更繰返す必要は無いのである。けれども同氏が信仰に入られた道行が今日の題をお話する上に、如何にも難有いから、今日は今一度この點をお話致さうと思ふのです。既に皆さんが御承知の如く御病氣は甚だ惡性の癌腫で、御一家を始め御一族の方々が非常

に御心配をなされ、歎きの上に歎きを重ねてお出なされたのである。豫ねて申すが如く、御子息が大層孝心のお方で、親御の御病氣を見るに見兼ね、病苦は致方も無いが、どうか精神上の安心を與へたいといふお考へから、度々二三の名士を招いて信仰のお話をお聞かせなされた。私が昨年初めて參つた時は、御本人、外皆さんの考へてをらるゝには、『世の中は實に無常である。生れた者なら必ず死ぬる。榮えた者は屹度衰へて、此世に幸福の續くといふことは無い、今自分等も斯の如き不幸に出遇つたのであるが、茲は一つ大に覺悟をせねばならぬのである諦らめねばならぬのである』と、斯う云ふ風に、只諦らめやうとしてゐられたのであります。正月の『求道』の上にもある如

く、御病人は寧ろ非常の衞生家で、從來より攝生の上には特に意を用ゐて居られたのであつた。然るに前生の報といふものか夫れ丈け注意して居つたのに、今此の如き難病に罹つて悲境に沈むといふはどういふ譯か、併し此が人世の有樣であれば、大に諦らめねばならぬ所であると、斯う云ふ具合で、一面よりいへば先づ愚痴をいふて居られたのであります。

私がその時皆さんに申したには、『成程人情より云へば皆さんのお考へは尤もである。一も無理はない。併し乍らたゞ諦らめねばならぬと力んだ所が、人間はほんたうに諦らむることは出來ぬのである。自分で自分を諦らめやうとするのは、恰も自分で自分の身體を上げやうとするが如きもので、到底出來ぬ。

もう此の場に臨んでは、人間は信仰上に氣付かせて頂く外は無いのである。然るに此の如き果敢ない人生に在つて、斯くの如く罪惡に惱んで居る我々をば、佛は廣大のみ惠みを以て、毎に哀れみ常に照して下さるのである。此の大悲の親樣が有り難いではないか。此佛の御惠みに氣がついた時が信仰である。人間は諦らめるのでは無い、此佛の大悲に安んじて行かせて貰ふのである。親鸞聖人の『和讃』にも、

彌陀觀音大勢至、　大願の船に乘じてぞ、
生死の海にうかみつゝ、　有情をよばうてのせたまふ。

とあつて、我々は知らぬけれども、彌陀觀音大勢至は、慈悲と智惠とを以て、唯我々を救はんが爲に、此の人生の生死の海に

往來して下さるのである。我々は如何に諦らめやう覺悟をつけやうと思つても、自分で自分を諦らめることは出來ぬ。唯此の廣大な御惠みを喜び、惠みに安心させて頂くのが信仰の味ひである』と、此點を力强く申したのであります。此時は御病人は丁度第五回目の手術を受けられた後であつたが、此話を聞いて成程と氣づかれたさうである。けれどもまだ充分の安心は出來なかつた。

處が、其御夫人が矢張り同樣に苦しんでゐられたので、此時側に居られた御子息甲松氏が母御に、今のお話が解りましたかと聞かれた。處が、まだ充分解らぬといふて居られる。そこで私の申すには、――此所が今日の講話の要點であります。――

『如何にも御無理が無い。一家今迄打揃つて平和で、又皆さんが非常に勤勉にお働きなされ、正直に行ひ眞面目にやつてお出なさつたのに、今斯くの如き病氣が起つたのである。皆さんの色々思ひになるのも實に無理も無いのである。併しながら此は如何に考へても、諦らめる事は出來ぬ。諦めることは出來ぬが佛の惠みは今此の苦味の中に頂くのである。實は人生の上より云へば、誠に御氣の毒な事ではあるが、佛の惠みは今此の病氣を離れて頂くのではない。此病氣の中に大悲の惠みが屆いて下さるのである。極端に申せば、此の病氣が卽ち佛の御惠みなのである。斯く言へば甚だ懸け離れた事のやうであるが、若し此の病氣がなかつたら、斯くの如く御一家打揃つて道を求めなさ

る事も無かつたであらう。又斯の如く眞面目に信仰をお求めなさる時節も來なかつたであらう。然るに今斯くの如く皆さんが熱心に法をお聞きなさるやうになつた事、既に病氣が御緣で佛の大悲が屆いて下さるのである。故に病氣に苦しむ事は、人生的には如何にも不幸の極であるが、而も此の不幸の中から、佛の大悲は、健康にたよるな、財産にたよるな、幸福にたよるな乃至子供の孝心にたよるな、唯賴にすべきは佛の大悲一つであるぞと敎へて下さるのである』と、お話したのである。處が御夫人は此話を聞かれて、わらく感動せられたと見わ、形をかへて喜んでゐられた。

丁度此の時私は高等師範に參るべき時刻となつて居つたので

私は其儘其方へ行つて仕舞つた。翌日甲松君が來られて、『母が昨日から大層喜んで』といふお話である。其處で私は其後再び伺つて見ました處が、御夫人は、彼の時初めて人生に彌陀善巧の御方便が解つたと言つて非常に喜んで居られる。此の所を皆さんに善く聽いて頂き度いと思ひます。御夫人が言はれるには、『自分には、十年前に亡くなつた一人の母（姑）があつて其母が非常な篤信者で、常に、人生は信仰でなくては行かぬから信せよ〳〵といふことを終始言つて聞かされたけれども、自分は今迄左程にも思つてゐなかつたのである。處が先日のお話を承つて成程今こそ信心を頂くべき時であると氣がついた刹那に、突然十年前に別れた母のことが思ひ出され、あゝ是れだ、

是を知らすのが母の心であつたかと思ふなり、――甚だ著しい話ではあるが、――あり〳〵眼前に母の姿が顯れて、それから四五日といふものは常に其母が自分の至る所についてゐて下され、又自分の前後左右に二三人の佛がついてゐて下さるやうな感じがして、もうお慈悲を疑はうとしても疑へない、今迄泣き悲しんでゐた病氣も、全く佛のお恵みであつた、本願のお催しであつたことが解つた』と言つて非常に喜んで居られたのである。そしてそれまでも此の御一家は擧つて佛敎を喜んでゐられたが、夫からは更に一層の感謝を以て看護をなさるやうになつたのである。

佛の善巧攝化といふことは、此の話で明らかに頂けるのであ

る。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦らめねばならぬ、斯う思はねばならぬと言つて居られた間は、ほんとうの信仰にはなつてゐなかつたのである。茲は甚だ大事の所であります。我々が信仰を求むる上に於ても、茲を斯う思ふのが信仰であるなどゝ思つたら、既に計らいにおちて居るのである。信仰は計らいや思ひなしでは無い。設へ口では同じやうであつても眞個の信仰にはなつてゐないのである。『今現に此の病氣、是れ實に信心を知らしめて下さる佛の御手廻はしであつた。母が存命中に言はれたも此處であつたか』と氣が附いた所で、初めて其刹那に人生の光景が一變した。今迄の人生の夢が醒めて、眞實の佛陀のお力、佛陀の恵みが顯れて下さつたのである。茲

で眞に信仰の光りの中に入ることが出來たのであります。

猶ほ色々申しますと、親鸞聖人の『和讃』の如きは、何氣なく讀んで仕舞へばそれ迄であるが、能く味つて見ると、一首々々に聖人が人生の上に深く大悲をお喜びなされた味ひが籠つてある。

釋迦彌陀は慈悲の父母、　種々に善巧方便し、
われ等が無上の信心を、　發起せしめたまひけり。

此『和讃』をお讀みになると、皆さんお解りになる如く、佛の善巧方便は實に種々にです。病人には病氣が善巧の御方便である。人生の不幸に沈んだ者には、不幸が善巧方便である。釋迦彌陀の慈悲の父母は、種々に我々の爲に御方便の手を垂れて下

さるのである。例へば幾人も子供を持つた母が、此の子は病身であるから斯くの如く仕やう、此の子は横着だから此の如く仕やうと、十人十色に其子々々に應じて心配する如く、佛陀は切なる大悲心より、我々一人々々の心の有樣境遇を見通して、其人間の最も頂き易い樣にと、種々に御導き下さるのであります

茲で一寸思ひ出しましたが、昨年の春九州に參りました時、久留米で崇谷四柱といふ人を病床に訪ねた事があつた。丁度其方の兄上の嗣道といふ方が私の舊友で、此兄君から賴まれて參つたのであります。其時申したが、一言ではあつたが、今の『和讃』であつた。私は近頃特にこの種々といふ文字を難有く感じます。一つでない、種々である。病氣になつたのが御方便で

あるばかりで無く、人生上の事は善惡共に皆此御方便ならざるものは無い。實に種々である。我々が日常の生活も、我々は知らずにゐるが、皆この御方便に催うされてゐるのである。私が此時も今の『和讃』を引いて御病人に申したには、『青年の身で御病氣をなさるのは、一倍苦味も多いであらう。けれども茲が大悲善巧の御方便である。若し此の御病氣が無かつたなら、貴方は徒らに信仰に趣く事が出來なかつたかも知れぬ。然るに今此の病氣が御緣で、廣大の惠みを喜ばせて戴くことの出來るのは、實に難有いでは無いか』と申しました。處が御病人は泣いて喜んで下された。其樣が今も眼に見ゆるやうであります。夫から私は一向手紙もあげずに居つたが、其後は毎日、『種々

に善巧方便し』と繰り返して喜んで居られたさうである。さゝして二三ヶ月を經て遂に逝かれたといふ通知を受けたのであります。

話が横道に這入つて、大層話の順が狂つて來ましたが、此の福間氏のみならず、崇谷氏のみならず、我々も皆んな日夜に此の御方便をうけてゐるのである。信仰はどちらからどういふてもよいが、何れにしても難有いと氣附いた時が、信仰の人となつた時である。難有いと分つた事が、卽ち信仰なのであります自分で信仰を求めやうとしてもいかぬ。又自分で信仰の内と外とを區別する事も入らぬ。兎に角、今迄は廣大のみ惠みがありながら、自分で御惠みを隔てゝ居つたのである。處が一點其の

御恵みが難有いと氣づくなり、人生皆此のお恵みであると分るのである。兎に角恵みに氣づかせて頂いた時が信仰に入つた時である。此の福間夫人や崇谷氏は、病中に在つて病氣が佛の御方便であると氣が附いて信仰に入られたのであります。

偖て、福間氏の御夫人は、夫から非常に喜ばれて、『今迄人を不足に思つたは、人を相手にしてゐたからである。佛の恵みを想はせて頂けば、不足も何も無くなつて仕舞ふ。人情では辛くも悲しくも思ふ時でも、大悲の前には皆消ゑて仕舞ふ』と言つて喜んでお出になる。之はまだ信仰に入られぬ前の事であるが、他より一通の手紙が來た。其の手紙はあまり善く無い手紙で、讀めば屹度不快に感ずると知つて居ながら、今迄はつい手

に取つて見度かつた。處がお恵みが解つてからは、夫を手に取らうとしても、側に亡母が居て、夫を止めて下さると言つて居られる。

以上は御夫人の喜ばれた道行きである。次に福間氏自身に就きては、どうかといふに、既に一月の『求道』にも、『獲信の記』が載つて居る事ゆへ、今更言ふまでもないのである。が御本人は、始めは隨分聞かれても眞實には未だ解らなかつたのであります。處が第六回目の手術を受けられた後で、病苦が激しくなつて、起つても居ても堪へられない。この福間といふ御方は、信仰後は無論のことであるが、從來より極めて眞面目な方で、實に立派な紳士である。決して無理などいふ人ではなかつ

たのです。けれども人間は、如何に立派な正しき者でも、佛の惠みに這入らぬ迄は、矢張り自分で努めてやつてゐるのである。普通に人生の修養と言つてゐるのは、人間の立場で自分の氣儘に押へて、努めて强いて善をすることである。之を普通に修養である道德であると言つてゐるのです。けれども或る程度以上は人間の力では堪へ切ることが出來ぬ。普通に道德や修養といふ事は、或る意味では、人間が苦痛を忍びて爲す所に、價値があると言つても善い位になるのであります。

福間氏は、今迄は能く堪へて來られたのであるが、此の第六回の手術を受けられた時には、もう堪へ切る事が出來ぬ。病苦

に攻められて、心が急になり、前後を顧みる餘裕もなくなつたので、其所で御子息や御夫人は全力を盡して種々に介抱せられるけれども何とも致方が無い。――私は茲は信仰のお話として遠慮なく申すのです。――其所で御子息は、自分も今迄色々と力を盡して見たが、もう此上は仕方がない。もう親孝行は止めである。又今迄は數珠を爪繰つて來たが、信心もゝう止めぢやと言つて數珠を切つて仕舞はれる。病人も彌々急になつてとても我慢が出來ぬ。出て行つて仕舞ふと言つて病人がづく〳〵病床を起たれる。といふやうな騷ぎになつた。其病苦の極に達して、病床に仰臥しつゝふと、『余は、佛陀が吾人を助け給ふといふことを聞きしものに非ずや』（獲信の記參照）と、氣附かれたので

ある。茲で氣がつかれたといふは、實に偉大なることであると思ひます。自分の子も妻も乃至自分の身體までが當にならぬ最後に至つて、佛の大悲に氣附かれたのである。

又家族の人達より言ふても、今迄根限り盡し、根限り親孝行して見ても、其場で親の病氣に代ることも出來ず、何とも仕方がなくなつた。も一つ言へば、親孝行の爲の念珠は切らねばならぬやうになつたのであります。

聖人は『歎異鈔』に宣はく、

親鸞は、父母孝養のためとて、一遍にても念佛申したることと、いまださふらはずそうろう。

と親孝行の爲の念佛ならば、最後に行けば消ぜて仕舞ふのであ

る。此の彌々の最後に達した時に、初めて佛のみ惠みは屆いて下さつたのである。之は信仰上最要點であります。

此間もふと氣が附いたのであるが、『觀無量壽經』で阿闍世王が、父の頻婆娑羅王を牢に押し込め、又母の韋提希夫人を苦しめた時、釋尊が韋提希の請によつて、王宮に降臨して說法をなされた。其時釋尊は、一言も、御前は氣の毒だとか、不幸だとかいふ人生的の同情の言葉は仰せられないのである。茲である。人間は如何に己れを制した所が、人間相手にやつてゐる間は、最後は倒れるより外に道が無い。如何に親が子供の爲に考へ、子が親の爲に憂ひた所が、最後には止めるより外に仕方がなくなるのである。親孝行の爲の念珠は切らねばならぬやうに

なるのである。けれども此の極に達した刹那に、一念、佛の惠みは斯くの如き者を助けて下さるお慈悲であつたかと、氣が付いて見れば、もう嬉しくてたまらない、丁度此時が第六回目の手術の後で、其の嬉しさのあまり、夫程の病苦の中から書かれたのが、一月の『求道』に出た、『獲信の記』であります。

偖て、私が斯く福間氏の御話をした所以のものは、昨日私が參りまして、御病人から承つた話を傳へたいからである。昨日は第八回目の手術で、實は結果の程もはかられぬ程に迫つて居つたのであります。けれども御病人は。ノートへ鉛筆で書いて非常に喜んで色々の話をせられた。一字一涙位の話でなく、文々全く血であると言はねばならぬのである。さうして文字に書

いて言はるゝには、『自分は今まで殆んど何とも云へぬ苦痛を嘗めて來た。が此の苦痛の中で此の廣大のお惠みを受けた事は實に何とも言へぬ程難有い。實は今日長老を招いた次第は、（御病人は我々を長老と言つて居られるのです）自分は此の病苦の中で斯く喜んで居る事を書き度いが、もう書く事が出來ぬ。自分は佛の御恩が身に餘つて嬉しい。何時淨土へ引き取られても更に心に思ひ殘す所が無く、只廣大のお惠みを喜ぶばかりである。だが廣大なる佛のお引取りで彼土に參らせて貰ふまで、此世にある限りは、此身は自分の身で自分の身で無い。皆佛のものである。佛の廣大なる御惠みの中のものである。それ故自分は此身體を飽迄大事にして、一寸も疎かにせぬ考へで居る。

どうか此喜びを聞いて欲しい。どうか茲を察して呉れ』といはれる。夫が今言ふ如く、皆血を以て書いた文字なのであります

で私の申したには、『能く解かりました。今日私の來た譯は、一は貴方が喜びを聞かせ度い爲め、又一は私に聞かせて澤山の人に喜びを頒ち度い爲であらう。貴方の心に別に求むる所があつてゞはないが、唯この喜びを告げたい爲であらう。苦しい病氣の中から、一々聞かずとも、苦味の中から筆を採つて御話になるので皆解かる。必ずこの事を皆んなに話しませう』と申した處が、非常に喜ばれた。尙ほ自分の喜んだ初めを皆んなに話し度いと言はれる。其處で又私は、『實に難有い貴方の御心である。佛敎では常行大悲と言つて、一旦信仰に入つたものは、

惠みが溢れて人に話すといふのであるが、貴方のお心が正に常行大悲である。貴方のお心は卽ち佛意の存する所であるから、私が屹度澤山の人に話しませう』と申したことであつた。

其中に彌々手術に懸るやうになつたが、どういふ譯か腹の物がまだ充分に下つてゐない。其處で醫師は又下劑を用ひたり、浣腸したりして、色々下さうとするけれども、思ふやうに行かぬ。其の爲め本人も甚だ氣が進まぬやうである。何か考へて居らるゝやうであつたが、中頃になつて突然『皆佛ぢや〳〵』と言はれた。之は一族はじめ、茲にゐる醫者も看護婦も皆佛でゐると喜ばれたので、私は非常に驚いた。私は寧ろ御病人に人生的に同情心を起して、煩惱を起しつゝ、眺めて居つたのに、本人

は是程に喜んで居られる。私は實に驚いたのであります。其處で私は、『何事も佛陀のお恵の中に、醫師の言の如くなされたら宜しからう』と言つて、法然上人が、親鸞聖人の三十三歳の時にお授けなされた善導大師の文

若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生、

此文を出して、此通り佛の恵みは毫も間違のない所であると申した。又熊谷蓮生坊へ、法然上人よりおつかはしなされた書面の、

義なきを義とす、樣なきを樣とす。淺きは深きなり。唯南

無阿彌陀佛と申せば、十惡も五逆も、三寶滅盡の時の者も一期に一度も善心無き者も、東西わきまへぬものも、決定して往生を遂げ候なり。釋迦彌陀を證とす。

といふ御言葉を讀んで、決定往生疑ひなきことをお話したのであります。すると病人はにこ〳〵と笑つて居られる。傍にゐられる一家の方も皆此の樣子を見て笑つて居られる。何うしても病床とは思へぬ程であつたのである。私は又進んで、

彌陀觀音大勢至、　大願の船に乘じてぞ、
生死の海にうかみつゝ、　有情をよばうてのせたまふ。
大願海のうちには、　智愚の波こそなかりけれ、
弘誓の船にのりぬれば、　大悲の風にまかせたり。

五濁惡世のわれらこそ、　金剛の信心ばかりにて、
ながく生死をすてはてゝ、　自然の淨土にいたるなり。
金剛堅固の信心の、　さだまるときをまちねてぞ、
彌陀の心光攝護して、　ながく生死をへだてける。

此等の『和讃』についても御話致したのであります。段々斯くの如く御話して居るうちに、益々難有い話が出て來て、昨日一月の十八日は、御生母の祥日に當るさうである。又先程も申した獲信の日も十八日であつたさうである。十八といふ日は屹度何かゞある。今日も實に難有い事であつたと喜んで居られた私は此の喜の中に別れて歸つたのであります。

斯の如き具合で、今日此事を話したのは、御病人が病中、此

の喜びを知らせたいといふ御本意であるからであります。度々言はれるには、『自分が死んだら醫學の爲に解剖をして貰つて善い。又臨床講義に行く必要があつたら、何處へでも行く』と申して居られる。又夫と同じく、『若し自分の樣子を見て信仰の爲になるならば、何處へでも行くから』と申して居られたのである。私は昨日其御樣子を見て來たから、之をお話するは、本人のみならず、佛の御意であると思ふのである。

茲に注意を要するのは、信仰を得れば平安になる、活動が出來ると豫期して居つたら、設へ信仰は、活動や平安の爲でないと知つて居つても、矢張り結果を見る事になるのである。例へ病人が後に佛のみ國に生るゝことが見ねたとしても、若しお惠

を頂くことが無かつたら、矢張り大なる間違ひである。信仰に於ては結果を見ることはない。人生の出來事は、設へ如何なる事が來つたとしても、皆佛の善巧の御方便である。斯くの如き難病の中にでも、惠みを喜ばせて頂く事は出來るのである。我々は、此の切なる御方便に催ふされて、遂に一點難有いと氣が附くなり、一度に隅なく大悲を頂かせて貰ふのであります。

（一月十九日）

（求道學舍日曜講話）

病牀の記を讀む

上杉文秀

予が福間久米吉君に會ひたるは、氏が獲信――明治四十年十月二十四日――の前一日なり。予は福間君を知らず。適々金港堂原禮子夫人の紹介によりて、始めて會談することを得たり。されど君は既に六回の手術を經て口舌其用を爲さゞりし時なれば、對座、予の語るを聞けるのみ。予は亦君が如何なる感想を抱かれるものなりやを識るに由なかりき。踰にて二十八日再び病床に語る。されど君の信念の如何は知るの限りに非ず。只令息令閨によりて、君が二日二夜懊惱煩悶の後豁然得る所あり、

心意安泰、擧止亦前日の例にあらずと聞く。爾後幾旬予は全く相會ふの機を失へり、茲に三月十三日病牀自筆の記を見、始めて君が信心堅固なる事を知り、轉た驚歎の情に耐へざる也。

其自傳を觀るに、君が幼時よりの孝順と、其一家の爲に盡されたる意氣とは、文字の絢爛たる無しと雖も、宛然として光彩の紙外に陸離たるを覺ふ。予は謂へり。此自傳のみにしても、あはれ世の懦夫をして起たしむるに足るべしと。更に、『獲信の記』を讀むに至りて、如來の慈光の徹到してかくまでも確信の樹立せられたるかに感じたり。更に『歳末の記』を讀むに至りては、信念の圓熟彌々深く、自己と信念、信念と家族、而して人生と運命まで、其の聯鎖を一貫するに堅固の信念を以てせる

は、予が隨喜して止まざる所なり。

予は若し全篇を通じて言はむか。是洵に宗教實驗の新らしき聲なりと。若し別して之を觀んか、君の信仰の歴程が、一々確然たる根柢を有して、以て吾人を警告するに非ざるかと。請ふ少しく之を陳べしめよ。

彼の善導大師は二河白道の喩を作りて行者の信心を守護し給へり。今彼を思ひ之を想ふに、彼の釋に『忽然として中路に二河あり』とは、君が過去幾十年、世態萬端に渉りて、諸有艱苦と鬪ひ、世間的活動を爲したるもの、是れ確に愛欲の念滔々として禁じ難く、順境に大波を揚げし貪欲の水の河に非ずや。されど世はいつまでも順境を持續せしめず、君が四大所成の肉身

は不幸難治の病を發し、病苦重疊、手術又手術、切開復切開、終に其善良の妻に對し其最愛の子に對し、道理も慈愛も打忘れ叱責嘲罵至らざるなしと、是れ確かに順境轉じて違境となり、忿怒に胸を焦したる瞋恚の火の河の狀態にあらずや。然れ共この時君には猶ほ未だ此水火の自覺はあらざりしならむ。されば令息が諸師を聘して種々の講話を聽かしめしといふも、その初は猶ほ感受の薄かりしこと、是亦大師の釋に、『百千里程の無人空迥の澤に、孤客が彷徨しつゝあり』といへるに似たらずや而も『無人空迥の處、群賊あり惡獸あり』――群賊とは如何、謂く手前勝手の理窟を捏ねる世智辯才は是れ。惡獸とは如何、謂く四大や五蘊や六塵てふ羸弱極まる醜肉團は是れ。――思ふ

に君が、『病魔と醫術と勝敗を決すべく、其舞臺に供せられたるは地上の殘屑たる此老軀にとりて何の光榮か之に過ぎん』とカラ力味したるは、まがうことなき群賊惡獸の誘惑にぞある。君は之を慰藉といふ。慰藉には非ず是れ誘惑なり。――君も亦之を後に覺りて滑稽なりしと笑却す。――噫、是等の慰藉は那ぞ能く生と死とを徹底せる大安慰の妙境に入ることを得ん。果して君は此の群賊惡獸を自覺して、無常觀となり、貪瞋二河を自覺して罪惡觀となり、『死を怖れて直に走りて西に向ふ』の求道の念を催したり。此時にして初めて村上、前田、近角、菅瀨等の諸師より豫ねて聽いて胸藏に潛めたる信仰の敎條は、幾度か繰返され、幾回か蒸返され、二日二夜の懊惱煩悶となりた

り。是れ善導大師の譬に、孤客が水火二河を認めて、『卽ち自ら思念すらく、我れ今回らば亦死せん。住らば亦死せん。去かば亦死せん。一種も死を免れずば、我れ寧ろ此道を尋ねて前に向ふて去かん。既に此道あり。必ず應に度るべし』とのたまひしものに非ずや。然るに宿善開發の機は、必ず東岸發遣の釋迦の御言、西岸招喚の彌陀の御聲に接すべし。君が『佛陀の喚起』といへるもの、疑ひもなく『汝一心正念にして直に來れ』の聲を聞きたるなり。――火と水の、その中道を行けよ人、來れと喚ばう聲を知るべに。――君は此時に正しく信心成就して前の煩悶の闇開け、初めて光明界裏の人となりたるならん。是れ大師の釋に、『決定して道を尋ねて、直に進みて疑怯退心を生

せず』と宣へるものに非ずや。而も君が此一念の確信によつて『今現に病苦に惱殺せられつゝあるも、佛陀の慈光に照耀せられたると同時に、恰も病患は拭消せられたるが如く、精神は平然として全く患苦を忘れ、現在確實に前途の光明の赫々たるを思念し、誠に心意の安泰比するに物なし』といへるものと、併せて、其家庭の人々が君の信狀と同じく本願一實の大道に歸入し、現に病床に侍しつゝ、念々稱名口に絶えず、手すり足すり水よ藥よの其の中にも、一種平安の氣の籠もれるは。是れ大師の釋に、『卽ち西岸に到れば、永く諸苦を離れて善友相見て慶樂已むことなかるべし』とあるを、現在の事實に示したるものといふべし。更に『歳末の記』を觀るに、一字一句も虛衒なら

ず。言々皆熱涙の迸ばしるを覺ゆ。況や是が大師の、『今二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念々に遺るゝことなく、彼の願力の道に乘ず』とあるに適合して、以て吾人をして敬慕の念を深からしむるものなるに於てをや。

噫。福間久米吉氏は、還相大悲の人に非ざるか。如來は巧方便力廻向を我等に與へんが爲に、其使命を君に負はしめ給へるに非ざる歟。噫、福間久米吉君！

明治四十一年三月十四日根岸養生院に君が危篤の狀を見て歸りたる夜之を記す。

福間久米吉氏

多田鼎

一　小序

親鸞聖人は、『愚禿鈔』の卷首に、

賢者の信を聞いて愚禿が心を顯はす。賢者の信は、內は賢にして外は愚なり。愚禿が心は、內は愚にして外は賢なり。

と仰せられてありまするが。鼎、竊かに自分の起居を省るに、誠に外には賢善のすがたを裝はうとつとめて內には愚惡の泥を漲らせてをります。されば若し茲に、外には種々の批難を受けながらも、竊に世の爲め國の爲めにも力を盡し、而して、內に

は親に向ひて孝、子に對して慈、一家常に和らぎ樂みて、春のやうな生涯を送り、而して最後には信念の寶冠を戴いて靜かに此世を去つた人があるならば、私共にとつては、誠に尊い善知識と申さねばなりませぬ。我が福間久米吉氏は正に此の善知識である。私が今此人に就て語ることの出來るのは、誠に不思議の宿緣であつて、衷心感謝の思にたへられませぬ。

二　經　歷

福間久米吉氏は、廣島の人であつて、安政五年の五月に生れられました。姉も妹もあられたけれども、何れも早く沒せられた故、所謂一粒種であつて、父母の愛撫をうけられた事は常並ではなかつた。『されば幼心にも是が泌み渡つて、別に大きな

事は成さずとも、唯孝の一事を仕上げて父母を安んせやうといふのが終生の願望であつた』とは、氏がその自傳にいはるゝ所である。明治十二年まで廣島の學校に學び、翌年東京に出て開成學校に入られたけれども、一は病身であつたのと、一は兩親を捨てゝおくことが出來ぬとで、幾くもなく退いて神戸に止り米人トーマス、ヲルス氏に投じて其通譯となり、月々四五十圓の收入を得て、始めて兩親を養はれた。此時氏は十九歳であつて、氏が社會上の奮鬪は是が始めでありました。

其後ヲルス氏の推薦によつて、氏は三菱會社に入り、三年餘此社の爲に努められた。後に共同運輸會社に入り專ら外人に關する事柄を受持たれた。が又轉じて獨逸の商會と手を携へて、

東京に支店を開かせ自らその店長となり、後に伊集院兼常氏に職を讓られた。是等の事は、氏が漸く二十七歳のことでありました。

暫く經つて、意見の合はぬ爲め氏は其商會を去つて、一時生計に難澁せらるゝやうになりましたが、志は少しも屈せず、後にサミユル商會に入り、其東京支店の支配を引受けられました其間に、原亮三郎、小野金六の兩氏と共に、大に九州石炭の輸出を初め、又神戸より米穀輸出の途を開き、二十六年居を全く神戸に移して、其後は關西に於て專ら外國貿易につとめられるやうになりました。

其間、タンク船にて石油の輸入を創め、又外國米の輸入を行

ひ、雨宮敬次郎、小野金六、成川尙義の諸氏に計つて外國市場に國債を賣出し、三千五百萬圓の外資輸入をも實行せられた。二十七八年の役にも、三十七八年の戰にも、常に裏面に在つて容易ならぬ骨折を致された。かくて三十八年末より三十九年の秋まで、滿洲を巡つて貿易發展の樣子を視察せられ、其年の十月神戸に歸られました。是れ氏が外に向つての活動の大要であります。

氏は固と剛毅不屈の人である。一たび志を起せば敢行して顧みぬ人である。されば妄りに志を曲げて人に合ふことを求めぬ其ために他と爭ふことも尠くはなく、隨つて多くの批難が氏に加へられたやうである。而も氏は之を切り拔けて、勇ましく突

進せられたのでありました。

三　家　庭

社會上の奮鬪の間に在つて、氏の衷心はいつも兩親を離れられなかつた。氏の父君は、寡言溫厚、敬神の念深く、他人に接するにも誠實であつて、喜んで陰德を積まれ一人も敵を持たれなかつた。『佛氏の所謂無我を現實にしたる人にておはしたりき』とは、氏の言はるゝ所である。而して母堂は、眞宗の篤信者であつて、辨義明かに勇邁不撓の性質であつた。良人の日々拜せらるゝ神棚の裏に、竊かに佛像を安んぜられた程の人である。家の人々に聞法を勸められた所、『法筵に出でゝ眠を催すことが多い故、寧ろ參らぬ方が善からうか』と申した者のあつ

た時母堂は之を抑へて、『いや〳〵、眠つてゐてもよい。御慈悲は一々の毛の穴よりも這入つて下さるゝ故』と申された。氏がタンク船にて石油の輸入を計畫された時、神戸地方の漁業者が、魚類に尠からぬ害毒が及ぶであらうと恐れて、是れを差止めやうとしても出來ぬために、激昂の餘、十餘人の者が或は白刃を提げ或は氏を殺して直に葬る爲ぢやと言ふて華をまで携へて氏の家に闖入した。其折氏も令室も不在であつて母堂一人居られた故其人々は母堂を脅して氏の在處を尋ねた。母堂は知らぬと答へられたが、猶も迫つて止まぬ故、母堂は、『それ程に久米吉を尋ねたいならば、私を直ちに殺せばよい、さすれば彼は極々親思ひの子故、今は何處に居るとも、母が死んだと聞か

ば、すぐに驅けつけて來るに相違ない。かくて彼を呼付けておいて、御前等の勝手にすればよいではないか』と申されました ればば、此一言に流石の亂暴の人々も、其のまゝ歸つた。而して其中三人は、遂に改悔して福間家と近しくせらるゝやうになつた、母堂が如何に異常の人であつたかは、是等のことによつて推測られるのであります。

氏は、斯樣な兩親によつて育てられました。されば氏の胸には至孝の思が自ら湧いて、常に父母を忘れることが出來なかつた。明治二十五年、父君の逝かれた時、痛く悲んで、自分の命脉も兩親あつて存するものであるといふて、當時の財產は殆んど葬儀の爲に傾けられた。其後、兩叔母に向つて月々衣食の料

を送られた。明治三十年母堂も逝かれた。其後氏は神戸に在るや、日々の墓參を怠られぬ。自分の室には兩親の影像をかけて毎朝御禮をせられた。長男甲松氏が東京法科大學に入らるゝやうになつて本鄉の同和學園に寓せらるゝことになつた折には、氏自ら甲松氏を伴つて學園に往き、學園の世話をなされてある菅瀨芳英氏に會ひ、其後家族の人に向つて、『菅瀨氏は眞宗の僧侶であられる されば甲松も、此後此宗旨の話が聞かれるであらう故、彼世の母君もどのやうにか御喜びなさるゝことであらう』と申送られた。一日、一人の壯士が氏の神戸の宅に來て激論の末に氏に向つて、『打ち殺す』、と言つた。氏は靜かに問はれた。『君には親はないか』。『ある』。『其親御をどうする積りか

私は今殺されても、父母共に此世には在さねぬ故、些しも氣がかりはないが、君は今私を殺せばすぐ獄中の人とならねばならぬ。その爲に御兩親はどの位ゐ御心配をなされるかも知れぬ。其御心配を何とも思はぬか』と、室の上の父母の影像を指しながら語られた。此一言にその人は忽ち懺悔して深く氏に心服せらるゝやうになつた。今此人は遼東に在るが、先日も態々東京に來て氏の病牀を訪はれたといふことである。至孝の動く所、何人も之に敵することは出來ませぬ。

氏の令室、亦舅姑に仕へらるゝこと厚く、氏に順はるゝことも亦厚い。明治十六年氏に嫁せられて、氏が困苦の間にも、些しも之を舅姑に知らしめず、常に兩親を慰め良人を助けて、良

人に後顧の憂ひのないやうにせられた。『兩親は、自分よりも彼女を深く愛して居られたのを見ても、其至孝の篤いのがわかるではないか。私は一日も其恩を忘れたことはない』と、氏自らいふてをられる。而して氏と令室との至孝は、氏の一家を動かして、甲松達吉正吉の三令息、亦打揃ふて、羨ましい程睦み和らぎ、至篤の孝心を兩親の前に捧げられてある。氏の自傳には、此三令息について、『我等に拂ふ彼等が孝情の至深至厚なる、却て我身の足らざるを恥ぢしむる程なり』と申されてある父母、妻子互に謝し　互に喜ぶ。氏が『以て吾輩の多幸を誇るに不足せず』と申さるゝのも、偶然ではありませぬ。

猶一つ此に加へねばならぬのは、福間家に、十年一日の如く

米吉の名を以て仕へてをらるゝ大村運吉君である。此人が亦溫厚忠實の人であつて、そして篤孝の人である。今日の世には稀に見るべき人であると思はれます。

かく、親も子も上も下も、唯一孝心を中樞にして、たふとき和樂の家を組立てゝをらるゝのが、卽ち福間家である。不孝の鼎、三度其家庭に入つて、慚愧と尊敬との思を抑ふることが出來なかつたのであります。

四　入信

福間一家にさき匂へる至孝和樂の風光が、現世一旦の事となり畢らずして、竟に之が永劫の榮ゑを、各自の上に開かるべき緣になつたといふことは、何たる貴いことであらうか。聞く所

によれば、氏は極めて散步を好まれて、而もそれを家の人々と俱にするのを喜ばれたといふことであるが、今は病苦の逆緣によつて、氏が家の人々と共に、大悲本願の大道に逍遙せらるゝといふことになつたといふことは、何といふめでたき次第であらうか。

氏は三十九年の十月、滿洲より歸られた頃、偶々小豆大の腫物が、喉頭に近い下顎の右側に出來た。そこで東京に出て岡田和一郎氏等の診察を受けられた所、惡性の癌種であると分つた故、四十年一月、岡田氏の根岸養生院に入り、二月に始めて岡田氏の手術を受けられました。けれども容易に癒らず。病勢は益々進むやうになつた。剛毅なる氏は、今より此老軀を、病魔

と醫術との戰場に供するのであると、自ら諦めてはゐられたけれども、苦痛は益々加はつて來た。そこで令息甲松氏は、深く之を愁ひて、遂に菅瀨氏を請じて嚴君に法話を聞かせられることゝなつた。福間氏の母堂は篤信の人であつたけれども、氏は少時より宗教に近づく事丈けは、母堂の心に背いて嫌ふてをられた。それ故菅瀨氏の御話も、初めは容易に納得せられなかつた。されど菅瀨氏は倦まず怠らず、初めは一週に一度、後には猶頻繁に尋ねられて、懇ろに御話を致された。かくて漸次に法緣が加はるやうになつて、村上專精、前田慧雲の二氏も其病床を訪はれ、近角常觀、上杉文秀の二氏も見舞を致された。其間に令室及び運吉君が深く道を喜ばるゝやうになつたが、氏自身

はまだ入信の人とはなられなかつた。時には、病苦のあまりに左右の人々を叱咤されて、宥めることの出來なかつたこともあつて、令息等は、道に入つてかく迄心を用ひながら、而も親に眞實の孝行を竭すことが出來ねば、もう宗教も駄目である。孝行もこれまでゝあるといふて、手にしてをられた珠數を切つて仕舞はれたこともあつたといふことである。氏は其間の經過を自ら『獲信の記』に言ふてをられます。

然るに如來無礙の大悲は、竟に氏の胸奥に透徹し給ふた。諸先覺の垂示と令息の孝心とは空しく終らなかつた。第六回の手術を受けて後、苦痛は益々激しくなつて堪へ切れなくなられた極、忽ち氏は如來の御慈悲に氣づかれた。此日は正に十月二十

四日であつた。されば氏は、此日は予にとつて無二の恩謝の日である、至鴻の紀念日であると申してをらるゝ『獲信の記』に其時の消息が漏されてある。

氏は英語に熟してをられて、國文を綴るに慣れぬと申してをられたさうであるが、至誠の動く所、此等の文字を成して、一道嚴肅の氣、深く讀む者の胸心を壓へ付けます。『淨土和讃』に仰せられてある。

慈光はるかにかむらしめ、　光のいたる所には、
法喜を得とぞのべたまふ。　大安慰を歸命せよ。

福間氏の入信は、正に此一首の證誠である。大光の威神力、今更ながら讃嘆致さずにをられませぬ。而して氏は、『正しく

是れ、母の念力が到り屆いたのである』といふて喜ばれたさうであります。

五　法悅

獲信の後は、溫かな法悅の水、いつも氏の胸に流れて、堪へられぬ苦しみの中に、氏は常に歡喜の生活をすゝめられた。第七回の手術の前に、泉道雄氏が病床を訪はれたれば、氏は先づ『病氣は私の恩人であります』と語られ、次に『只今から、私は耳と眼との葬式に參ります』と、にこ〳〵しながら語られた其手術已後は、全く一方の耳が聞こゑず、一方の眼も見ゑぬやうになることが、豫じめ分つてゐたからであらう。塚本次郎氏が、近角氏の紹介によりて氏を訪はるゝやうになつたのも、此

頃のことであつた。塚本氏が温厚の風容と、其面白き談話と、又其上手の尺八とは、少からず氏を慰められたやうである。かくて福間氏は家の方々と是等の道契の人々との温情の間に、愈々深く向上の歩を進められました。

此頃、氏は頻りに、佛教は實に現在の安住を與ふるものであつた、世の人は是を知らずにをると申してゐられた故、『現在も大切であるが、又未來も疎そかに考へて居つてはならぬ』と傍の人が申したに對して、氏は筆を採つて、『現在でさへ、かくまでの御恩にあづかつてをるもの、未來の御たすけはいふまでも無い』と答へられました。又此頃、傳道の方策などにも心を用ゐ、佛書の英譯なども致したいと申してをられました。

昨年十二月、苦痛の間に、家の人々に示す爲に筆を執られた『歳末の記』は、『獲信の記』と相並んで、甚だ尊い文字である。其全篇を讀んで、誰か胸せまらざるものぞ。越ねて本年に入り、一月の二十日に第八回の手術を受けられた。其折、塚本次郎氏は、氏が手術を受くる爲に出で立たるゝのを見送つて、『あなたは、如來護らせ給へば、私は御送を致しませぬ』と申されたれば、氏は一寸振り回つて兩手をあげ、元氣よく、頭の上に大きく圓環を畫きて去られた。多分、御まへの云ふ通り、常に諸佛菩薩はかやうに護つて下されてあるとの旨を答へられた積りであつたであらうと、塚本氏は語られました。此頃まで氏は毎日の運動を闕がされなかつた。が衰弱は追々に加はり、

病勢も增して參つた。鼎が始めて氏の病床を訪ふたのは、二月の十日でありました。

六　往生

昨年の十一月、鼎は靜岡の報恩講に詣でました。其間に前田慧雲氏が千葉に見えて、樹德會の法筵で、福間氏の入道の因緣を語られ、道友一同、深き感喜を催しました。私は千葉に歸つて之を聞き、亦尊いお話であると喜びました。十二月に入つて塚本氏より、是非一度福間氏を見舞へとの手紙が參つた故、出京した所、少しの手違ひがあつて、遂に訪問の緣が闕げました然るに先月八日、再び塚本氏よりの催促があつた故、十日午後塚本氏に導かれて養生院に參り、始めて氏及び家族の方々にあ

ふの御緣を得ました。道契譽田豐吉、中柴宇一の二氏も一處でありました。其座で菅瀨氏にも御目にかゝつてありがたく存じました。其折、床の間の小さい佛檀に禮拜の後、私は『恩』についてお話致しましたが、後にて聞けば、其折は痛みが烈しうて、氏には善く受取れなかつたさうであります。他心徹鑒の力無きを悲みました。其時甲松氏より、曩に村上氏によつて、『修道講話』が嚴君の病床に傳へられ、ついで『プレイゼス、ヲヴ、アミダ』（阿彌陀佛の鑽仰）も其手に繙かれ、後に塚本氏によつて、『正信偈講話』も亦傳へられたことを聞いて、道緣の不可思議であるのに驚きました。

其後、甲松氏より度々鄭重の消息を受けました。鼎はいつも

其封筒に滿つる氏が至孝の心に動かされました。而して又是と共に、嚴君が、日々加はる衰弱の中に不變の法悅を續け給ふを聞いては深く喜ばせて戴きました。嚴君は常に珠數を離されず思ひ出す度に取り出しては御禮の稱名を致されました。後には小き佛檀を病床の上にくゝりつけて、其禮拜に都合の善いやうに致されました。

三月に入りて、經過段々によろしからず、上旬の末に及びては、遂に昏睡の狀態に陷るゝことが度々になつた。而も何たる不思議ぞ、信念の事に就いては其辨別が極めて明かであつた。或時甲松氏は、病床の側に居て菅瀨氏に對して、御稱名は尊いものである。心配あるも煩悶あるも、一たび稱名を致せば、直

に胸の中が爽かになるやうに思はれると申された處、嚴君忽ち病牀の上より、甲松の念佛は私の念佛とちかふと叱咤せられた是を聞いて甲松氏は、一つは驚いたけれども、又よくも斯樣に明確な信念になられたかと、難有く思ふたと申し越されました

中旬を過ぎて、病態益々惡しくなつた。されど稱名は忘れられなかつた。近角塚本の二氏は度々訪はれ菅瀨氏は殆んど病床につきづめであつた。鼎は十六日の朝、再度の訪問を致しました。此時は既に全く昏睡に入つて居られました。其日は巢鴨に宿り、翌十七日午後二時千葉に歸りましたれば、翌日菅瀨氏より、二十日午後葬送の御通知を得ました。我が福間氏は實に十七日午後七時五十五分に、其母君の待ち給ふ御淨土に向はれた

のでありました。年、五十一であられました。臨終の枕元には菅瀨、近角の二氏、福間氏の令室及び令息、其他の方々と共に臨まれて、嚴肅なる御稱名のうちに、此善知識の往生を送られました。而して遺體は、間も無く養生院を出でゝ、福間家の寓居と定められたる、上根岸の瓜生中將邸の一室に移され、十九日に、氏の遺言によつて解剖に付せられました。局部の外には腦にも何所にも、異狀はなかつたとのことでありました。

二十日午前八時、鼎は千葉の草堂を出で東京に向ひました。雨が將に降らうとしてをりました。東京に入り淺草に寄り、少しく降り出でたる雨を冒して根岸の瓜生邸に驅けつけたれば、香煙門に搖らぎて、少からぬ人々が既に奥の一室に跪いてをら

れた。茲に福間氏の遺骸が安んぜられてある。床の間には三尊の聖像高くかけられて、其前なる柩の前は清らかに莊嚴せられてあつた。丁度、讀經が終つて、今將に菅瀨氏が、『獲信の記』を讀まれつゝある時でありました。多くの人々と共に、誠に難有く思ひました。菅瀨氏の外、近角、上杉、泉の三氏と塚本氏と丸茂令室とに御目に懸りました。

女子の人々の燒香の後、柩が將に門を出やうとする時、樂隊の哀悼の曲が奏せられた。花で美しく飾られた馬車は柩を乘せて歩をすゝめた。菅瀨氏が導師のつとめを引受けて下さつた。近角、上杉、泉の三氏と共に、鼎は一輪の馬車に入れられて、其列に加はつた。雨は烈しく降りしきるやうになつた。哀婉雅

亮の樂の音は、其中に絶にては又續いた。上杉氏の心ぞにによつて、私共は、車の中で共に『小經』を點讀し乍ら進みました花も音樂も、皆嚴君を慰めんが爲の、令息の心づくしであるといふことを聞いて、一入尊く思ひました。

二時に、行列は谷中天王寺畔の齋場についた。村上、前田の二氏も來り會せられた。岡田氏も來られた。故人に極めて昵懇であつた人々ばかり集まられた。燒香勤行靜かに行はれて後、此度は菅瀨、近角、泉の三氏と共に車を同うして、町を過ぎ野を越にて、遺族の方々と共に遺骸を火葬場に送りました。令息の方々の胸を思ひ、種々の想が胸にせまりました。

再び瓜生邸に歸り、法名の前にて、『小經』を誦し、令息の

もとめによつて、鼎は『獲信の記』を讀みました。御齋の後、近角氏の御話がありました。鼎も少し御話を致しました。時は既に七時を過ぎて、雨の音が寂しげに樋に聞こにてをる。塚本氏は尺八を取り出して、燈の下に、靜に追悼の曲を奏せられた清韻、此所より遠く彼世へも響き行くやうに覺にて、人も我も限り無き思にうたれました。塚本氏は、遠からず其故園の柳川に歸らるゝのである。私共は、氏が都に留まられる間の盡誠に對して、御禮を申さずにはをられませぬ。

八時、別を告げて、巢鴨に向はん爲に日暮里の驛頭に立つた時、鼎は、只々、宿緣の不思議を今更のやうに繰返して感せずにをられなかつたのであります。

『求道』の上に於ける、近角氏の講話『善巧攝化』の一篇は福間氏の入信及びその法悅を陳べられたものである。鼎は千葉にあつて、一道友を訪ふて是を讀み聞かせました。此道友は久しく病の床にあつて、今猶ほ靜養してをる所の人である。此一篇を讀み終つた時、此友は鼎に對して、福間氏の御わづらひは全く我が爲のやうに思はるゝと言はれました。

誠に福間氏の入信及び法悅、廣くいへば其五十一年の生涯は私共にとつて、尊い敎訓を示さるゝものである。大悲の御力は如何ばかり强くあらせらるゝか、大信の御はたらきのどのやうに尊くあらせらるゝかは、明かに此生涯によつて證明致さるゝのである。氏の全生涯は、昨年の入信によつて一點の疑をつけ

られたのである。氏の入信によつて、その全生涯は生きかへつて、一々のことが皆尊嚴の旨を示してをる。私は、此に不可思議の法緣によつて、此一個の善知識の生涯を見ることの出來たのを謹みて感謝致さずにはをられませぬ。福間氏逝焉の後第八日、中祖の御命日の午後第一時、千葉の草堂で認めました。

獲信の餘瀝

泉　道　雄

昨年以來、屢々本紙に紹介せられました福間久米吉氏は、遂に三月十七日に逝去せられましたが、私は不思議なる因緣によつて、氏の生前、數回病床をお訪ね致し、氏が如來のお慈悲を無我に喜ばるゝ模樣を目のあたり見て深く感じましたが、その　なくなられた後は、棺前にお通夜を申し、遂には葬儀の末席に列なり、更に引續いて、神戸廣島の追弔會までも出席して、同地方の有緣の方々に、故人の獲信の模樣を詳しく披露致しましたが、今又本誌上に於て、故人の信仰に對して、私の所感を述ぶ

るのは、一は無き人の思ひ出の爲め、かつは又讀者諸君と共に修養の道を辿らんが爲めである。

福間氏の信仰に就て、私は三つの感じた點があります。第一は、その信仰に少しも不純の點が無かつた事であります。第二は、宗教は方便に非ず、絶對の眞理なるが故に之を信ずるといふ點である。第三は、醫師の信賴と佛の信賴といふことが兩々相待つて進んだといふ點であります。此の三つの點は、左程珍らしい事では無いかも知れぬが、福間氏の實地の信仰を目擊せる私には、論理以上に非常の趣味あることゝ感じます。

第一、その信仰に少しも不純の點が無かつたと申すのは、福間氏の信仰は、如來樣に對する絶對の信賴で、其心中眞に純潔

無垢であつたと申すのであります。言葉を換へて言へば、胸中少しの疑心をも懷かず少しの雜念をも交へず、頭の先きから足の爪先きまで、渾身これ凡て信といつてもよい程でありました從つて其の信念の堅い事は、とても〳〵常人の想像の出來ない程でありました。それに就て私の感じた事は、福間氏が一切の迷信を却けられたといふ事であります。勿論淨土眞宗に於ては一切の迷信を排斥して、唯彌陀一佛に歸するを宗義としてゐますから、今更物珍らしく言ふ迄も無いのでありますが、福間氏の周圍の事情から考へて見ますに、餘程堅固な信仰が無かつたなら、決してかくまでに甘く行かなかつたであらうと思はれます。皆さんの御承知の通り、東京は實に現世利益の祈願請求が

盛んな所であります。池上の本門寺や、川崎の大師や、成田の不動や、穴森の稲荷なぞは、いつも〳〵熾んなる參詣者があります。かゝる有樣でありますから、一旦病氣に罹るとか、商賣に失敗するとか、何とか事件があると、きつと神佛に願をかけたり、御守りを頂いたりすることは、東京人士の平常普通の事として怪しまないのであります。之は單に中流以下の人のみで無く、敎育あるものや、身分のある方々でも、皆竊かにやつてゐるのであります。現に福間氏の内にも、方々から色々のお守を贈つて來てゐます。併し福間氏は決して左樣なものに對して心を迷すやうな事をせられない。それかと言つて人が親切に送つて下さつたのであるから、無下に之を却けるのは如何にも人

の好意を無にする譯であるから、一應喜んで之を受けて謹んで其厚意を謝せられた。併し少しも之にたよる心が無かつたのでありますから、他から貰ひ受けたお守は皆一緒に集めて戸棚の中に仕舞つて置かれて、ちつとも之を顧みられなかつたのであります。ある日丁度私が伺つた時に、年來福間氏の御出入をしてゐた人が參りまして、主人の病氣を心配して申しますに、『私はどうかして御主人の病氣を平癒させ度いと思つてゐますがどうも思はしくありませぬから、私は三週間程斷食堂に籠つて主人の病氣快復を祈らうと思ひますが、如何なものでしやう』といふ相談をしかけました。その時私は、その人の心は誠に結構であるが、その行ひはあまり感服しない。否なその行ひは却

つて御主人の意に反するものである事を懇々述べました。ところが主人も予の言葉に贊成を表せられて、累りに首肯いてゐられた。元來念佛行者は、如來の大慈悲に攝取せられてゐる身分であるから、此の上何の不足があつて他の諸神諸佛を祈願する必要があらうぞ。『現世利益和讃』には、

南無阿彌陀佛をとなふれば、　觀音勢至はもろともに
恒沙塵數の菩薩と、　かげのごとくに身にそへり
無碍光のひかりには、　無數の阿彌陀ましゝて、
化佛をの〳〵ことゞく、　眞實信心を守るなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、　十方無量の諸佛は、
百重千重圍繞して、　よろこびまもりたまふなり

目の手術の當日も、いつものやうに信仰談をせられて、さてい
よ〳〵本人が手術に趣かるゝといふ時、塚本君は火鉢を擁しな
がら、『福間さん、私はもう貴方を送りませぬぞ。貴方は佛樣
が御守護なさつてゐるから大丈夫です』といつて座を立たれな
かつたさうです。すると福間氏は微笑を漏しつゝ、塚本君を顧
み、兩手を巡して體を取り圍む樣な手眞似をして出て行かれた
その意味は、澤山の佛樣が自分を圍繞して守つて下さるから大
安心だといふ意味でありましたさうです。私は塚本君からその
話を聞きました時、福間氏は實にかの、『現世利益和讃』のそ
のまゝの利益を身に體達してゐられたのであつたと、痛く感服
した次第であります。

とありますからは、信心を頂いた人々は、自分の方から求め
ないでも、已に業に非常な利益があります。然るに、兎角如來
樣のお慈悲を忘れて、別に祈願請求を凝らすやうな事をする人
のあるのは、眞に佛のお慈悲に氣がつかないからであります。
此點になりますと福間氏の信仰は、實に堅固なものであります
丁度福間氏が第八回の手術を受けに行かるゝ時のことであり
ますが、塚本次郎といふ人が訪問せられたさうであります。塚
本君は、かの網島梁川氏の病床に侍して、基督敎信者の彼れに
他力念佛の妙味を味はしめられた人で、非常に難有い人であり
ますが、以前より度々福間氏の病床を訪づれて、信仰談やら、
又君の得意の尺八やらで、氏を慰めてゐられましたが、第八回

次に第二の點に就いて申すべき事は、一體世間普通に、宗教なるものは方便的のものであつて、眞實のものでない。老人や婦女子又は病人などの心を慰めんが爲に必要なものであつて、學問のある者や年の若い者には必要は無いと思ふ人が澤山あるやうに見受けます。若し宗教がこんな意味で必要であるならば宗教は確かに、人を慰藉する道具に過ぎない。病人や弱者の玩弄物に過ぎない。併し宗教が果してかゝる意味のものであらうか。福間氏は其の點に付いて信ずる所が非常に强かつた。氏は常に云つて居られた。『佛教を信ずるのは、佛の說かるゝ所が絕對の眞理なるが故に信ずるのである。佛の存在や佛の慈悲は疑ふにも疑へない事實であるから信ずるのである。然るに世間

の人は、福間は病氣に罹つて、もう何も外に慰藉するものが無いから、止むを得ず宗教を信じたのであるといふやうな事を言ふ人があるかも知れぬが、自分は決してそんな卑屈な考へや、方便的の考へで宗教を信ずるものでは無い。此の事は大いに社會に吹聽せねばならぬ』と云つてゐられた。嘗て砂川辯護士が氏の病床を尋ねられた時、福間氏に向つて、『宗教でも信じなければ、他に心を慰めるものがあるまい。まあ、結構なことである』といふ挨拶がありました。その時福間氏は、砂川君は宗教を方便的のものゝ樣に考へてゐるが、宗教は決してそんな方便的のものでは無いといふ事を辯解しやうとせられたが、病苦に妨げられてその意を果さなかつたといふ事を後で語られてゐ

た。三月八日の日であつたかと思ひます。大分病氣も危篤に瀕した頃でありましたが、長男の甲松君が菅瀨師に對して、『父もお蔭でお念佛を唱へるやうになりまして、病苦も輕くなりました』と述べられた所が、病人は病苦の中から、『甲松の念佛と己れの念佛とは念佛が違ふ』と申されたので、一座の方々は大に驚かれたといふ事であります。甲松君は別に深い意味があつて申された譯ではありませぬが、病人の方で見ますと、もう信仰以外腦中には何物もありませぬから、此方ではさ程深いつもりで話さないことでも、本人の胸をば著しく刺戟したのであらうと思ひます。その念佛が違ふと言はれて意味は、如何樣にでも解釋がつきませうが、私の考ふる所では、甲松君の言はれ

た意味を惡くとると、自力の念佛のやうに聞こます。方便の爲めの念佛のやうにも聞こます。念佛を唱へるので病氣が輕くなるとか、病氣を輕くせん爲めに念佛を唱へるといふ風にも考へられます。ところが福間氏の念佛は、そんな念佛ではない。病苦を輕くせんが爲めの方便的の念佛では無い。氏の念佛は只だ如來のお慈悲に對するお感謝の念佛である。病苦の中からも、佛のお慈悲を喜ばして貰ふお禮の念佛である。歡喜の念佛である。此點は、實に些細な相違のやうであるけれども、よく〳〵考へると大變な相違がある。前者は半自力半他力の念佛であるが、後者は絕對他力の念佛である。こゝの區別が本統に解からないと他力の味ひは解らないのであります。若し始めから病氣

を輕くする爲めの念佛でありましたなら、或は失望に終つたかも知れませぬ。どんなに念佛を唱へても、佛のお慈悲の見ねない間は、到底安堵することが出來ない。こゝは動もすると誤解のあり易い所であります。兎に角念佛は絶對なるが爲めに稱へざるを得ない。眞理であるから唱へるのである。福間氏の信仰は實に此點に達せられたのであります。

最後に福間氏の信仰に就いて、最も私の感じた事は、第三の醫師の信頼といふことゝ佛の信頼といふことゝ兩々相待つて進んだと言ふことであります。言葉を換へていへば、佛の信頼が直に醫師の信頼であつた。尙適切に言へば、醫師の信頼を離れて、佛の信頼は無い。佛の信頼を離れて、醫師の信頼は無かつ

たのである。普通世間の人の樣子を見ると、どうも其邊の模樣が違つてゐるやうである。と申すのは、世間の人では、いろいろ醫術を盡して見て、到底醫術でも見込は立たないといふ事になつて、始めて宗教を信ずる樣になる人が多い。又は醫者にかゝつて療治がして見度くつても、入費の許さない點からして、醫者はお止めにして神佛にお祈りする人も隨分見受ける。甚しきは、一方ではお醫者にかゝりながら、他の一方では密かに神佛に祈願するものも少なくありませぬ。此等は皆、宗教なるものをお醫者の代りに用ひやうとする人達で、甚だ間違つた考へであります。

元來、私共が宗教を信ずると言ふ事は、決して交換的意味を

以て信ずるのではありませぬ。尤も利慾に狂奔する今の社會におきましては、宗教の利益を説いて之に引入れるも一の方便かも知れませぬ。併し乍ら、宗教の本旨からいへば、決してそんな利益問題の爲に信ずべきものではなからうと思ひます。――少くとも私共の奉ずる他力眞宗に於ては決して左樣な意味合はないと信じます。自己の『罪惡』と言ふ事や、佛の慈悲といふ事に氣がついたならば、信ずるなと言はれても信ぜずにはゐられないといふ所に味ひがあるのであります。此意味に於ける佛の信賴が、始めて眞正なる宗教的信賴であると思ひます。之に反して、中には醫術ばかりを信賴して、死ぬる間近くまで、自分は大丈夫助かるものであると信じてゐた人が、いよ〳〵死と

言ふ事を宣言せられた爲めに、非常に失望落膽し、却つて死期を早めたといふ例も少くありませぬ。

先達ても、福間氏と相前後して逝かれたさる富豪の老主人がいよ〳〵死期に迫つた時、家族や親族の者は、死を宣告するが善からうかどうかと云ふ事を大隈伯に相談した處が、大隈伯の意見では、告げ無い方が善からうと言ふ事で、遂に死と言ふ事を知らさずに死に就かしめたといふ事を承りました。之も宗教の無い人には致方の無い事でありますが、吾々の立場から考へますれば實に不憫に思はれるのであります。此等の點に關しては福間氏の宗教的信賴と醫者の信賴とは、兩々相俟つてよく中庸を失はなかつたのであります。

福間氏が醫者を信じて居られた事は非常なものでありました未だ獲信に至らない前、卽ち第二回の手術の如き、已に其模樣がちやんと現れてゐました。醫者の方では、病人に對して氣の毒に思ふのと、一方には治療がなか〳〵の大手術を要するので實は躊躇する氣味がありましたが、本人の方から、どうぞ思ひ切つて療治をして下されと進んで出られたので、醫者も餘程本氣になつて手術にかゝらるゝ樣になつたのであります。第三第四回の手術も、さういふ調子で治療を受けられたのでありますが、第五回目の時には、本人が魔醉藥にかゝつて囈語を言つて居る時に、『岡田博士は日本一の醫者のタイプだ、その人に任かしてゐるのだから大丈夫だ』と云ふ意味の事を申されたさう

である。之を聞いた岡田博士は、如何なる感想が胸をついたでありませう。自分の治療を受けつゝある患者が、かくまで自分を信賴して呉れるかと思へば、自分の全力を注がずにはゐられなかつたでしやう。果して岡田博士は福間氏の最後に至る迄、看護に治療に非常に盡力せられたのであります。福間氏の死後葬儀の式場で、岡田博士が導師及び參列の僧侶諸師を顧みて、『貴方がたのお蔭で、私も思ふ存分の手術が出來ました』と申されたが、實に之れ學術界の美談であります。

併し乍ら、福間氏が醫師の信賴と言ふ事のみに止つてゐられたなら、必ず途中でその信賴は壞れて仕舞つたに違ひない。現に第六回の手術後に於て、傷口の痛みと精神の懊惱とは一時に

起つて、全身の骨々を切斷せらるゝ樣な苦痛がした爲に、さすがの福間氏も遂に堪へ兼ねて、其不平は一時に發し、其長男を責めて、『甲松は僞孝である。己れの許可も得ないで、醫者と勝手に相談して餘計な骨まで切り取らした。――貴樣達は寄つてたゝつて己れを苦しめる。此んな處には己れは居らぬ』と云つて、此重患の人がノコ〳〵立ち上つて病床を出て行かうとせられたさうである。何たる悲慘の極でしやう。此時長子甲松君も、實に失望悲哀の極に達して遂に佛前に涕涙て、『神も佛も此場に及んでは何の役にも立たない。もうお念佛も止めぢや』と言つて、數珠を寸斷せられたさうである。あゝ、今迄一縷の望を繫いでゐた醫術も、到底信賴する事は出來なゝなつた。ま

さかの時の役にもと思つて稱へてゐた念佛も、此場に及んで寸分の効をなさない事が解かつた。天にも地にも信賴すべきものは一つも無い。病人は本より一家悉く絶望の淵に沈んで、一時に世界が眞闇になつたのである。人生の不幸も是に至つて極まれりと云つべしである。

此で私共の注意すべき事は、人間の境涯に於ては決して絶對に信賴すべきものが無いと言ふ事である。富も信賴するに足らない。妻も信賴するに足らない。息子の孝心も信賴するに足らない、乃至醫者の技倆も信賴するに足らない。此等はいつか必ず盡きる時がある。間に合はない時がある。其時に及んで今更の如く驚いても何の詮も無い事である。又宗敎なるものも、何

か爲にする所があつて信ずるとか、親孝行の爲に信ずるとか、そんな淺墓な考へで信じてゐる間は到底本物にはなれない。此等も必ず壞れる時がある。まさかの時には決して役には立たないのである。甲松君が數珠を切つて悲歎に沈まれたのは偶然では無い。親鸞聖人も、『父母孝養の爲めに一遍の念佛申したること候はず候』と申されてある。若し親孝行の爲に唱へる念佛であるならば、それは自力の念佛である。自力の念佛は必ず盡きる時がある。いよ〳〵詮じつめた所に行くと、もう間に合はなくなつて來る。是に於てか、神も佛も無いものにして念佛は止めちやとまで絶叫するやうになる。併し此所まで進むと始めて絶對他力の味ひが分る。佛のお慈悲が知れるのである。第六

回の手術後の福間氏は實に此の自力信仰の破壞の極點に達した果然、此の悲劇のあつてより六日目、卽ち十月の二十四日に至つて、福間氏の大獲信の期は到來したのである。

獲信後の福間氏は、實に生れ變つた福間氏であつた。絶對の佛に信賴せらるゝ彼は、又一度壞れたる醫師の信賴を復活せしめた。氏は遂に言はれた。『自分は佛の守護を受けて居る體である。佛が善き樣に取り計らうて下さるのである』と。又、『此の肉體は佛より預つた身體である。佛のお召になる迄は決して粗末にしてはならぬ。いよ〳〵もつて尊重して保つべきである。我は一日一時でも、此の體のあらん限りは衞生保養を怠つてはならぬ』と、何たる美しい言葉であらう。斯て氏は此の言

の如く、肉體に關しては全く岡田博士に一任して、治療と養生と兼ね備はつて少しの遺憾も無かつたさうであります。蓮如上人は、『要心をして事の出來候を、時節到來とは申すなり。養生をせずして事の出來候を時節到來とは云はぬものなり』と申されてありますが、瀕死の病人に此の決心と用意とのあつた事は、誠に佛德の廣大なるを證して餘りあるのであります。儒教に謂はゆる人事を盡して天命を待つと云ふのは又之に外ならないものと信じます。

斯くて氏は、病苦の中に平安の樂境を見出しつゝ、落日の徐ろに西山に春づくが如く、安らかく平和に、家族の歡喜稱名の下に送られつゝ彼土に往生せられたのである。氏が五十年の一

生、實に奮鬪活劇の歷史であつた。而も此の歷史は、或は湮滅する所無きを保せない。只その獲信の事實に至りては、永遠に此の生命を不朽ならしむるのである。此の尊き獲信の餘瀝を披露したのも、故人を偲ぶ思ひ出の爲めである。

葬儀の模範

『警世新報』

去月二十一日の都下各新聞に於て、注目すべき死亡廣告の掲載せられたるを心附きし人あるべし。そは、男福間甲松、友人原亮三郎、關直彦等九氏によりて報せられたる福間久米吉氏の死亡廣告にして、『十七日死亡昨日葬儀相營候（乃至）右は遺言に依り事後に御通知申上候』とあり。葬儀前に報告するは普通なれど、葬儀後に報告せる廣告は恐らく空前なるべし。その廣告の空前なりしが如く、其葬儀も亦質素と嚴肅と相備はり、そゞろに人をして、死者の生前いかに善良なる心懸けなりしか

を偲ばしめたり。

今、氏の遺言に基きたる、殆んど理想的とも稱すべき葬儀の狀況を記せば、去月二十日午後一時、根岸の瓜生中將邸より出棺、谷中共同墓地に於て氏の葬儀は行はれたり。導師は豫ねて敎化を蒙れる恩師菅瀨芳英氏にして、之に生前の師友たる近角常觀、泉道雄、上杉文秀、多田鼎の諸師加はりて、何れも墨衣に墨袈裟を纏ひ、折りからしきる降雨と相待ちて一層哀趣を深からしむ。棺は二頭立の花馬車に乘せ、導師及び導師付の馬車二臺之が先驅を爲し、悲調を帶べる洋樂の吹奏は、或は高く或は低く、悲泣雨涙の感を催さしむ。一行は、上野博物館前を横斷して、谷中の齋場に入れり。聞く所によれば、花馬車に用ひ

し草花は、次男達吉氏が神戸の花園にて自ら造りしもの、生前父の眼を樂しますこと能はざりしを遺憾として、殊更に之を飾りしものにして、其洋樂を加へしも、亡父の日頃樂しめる音樂を聞かしめんとの至孝心に出でたるものなりとか。佛式と洋樂墨袈裟と馬車、一見ハーモニイを缺くの感あるも、此間自ら調和あり照應あり。謹嚴莊重の極、人をして襟を正さしむるものあり。徒歩棺後に從ふものは、遺志に隨ひ、家族及び親戚故舊數十名あるのみ。谷中の式場に至れば此處には多數の參列者ありしも、之れとても自然に聞き傳へて參集したるものにて、別に案内を受けたる次第には非ず。蓋し生前の遺言に基きて、葬儀の時日を公表せざりしを以て、義理一片の會葬者をして足を

斷たしめたるなるべし。其他香華放鳥の類も兼てより一切その寄贈を斷りたるなりと。尙參列者の中には、前田村上兩博士、船越男爵、雨宮敬次郎、小野金六、原亮三郎、野間吾造、英修作、關直彦等二百餘名、知名の人々をも數多見受けたり。式後主治醫岡田博士驅けつけ來り、恭しく棺前に燒香し、導師を顧みて、『貴僧方の御蔭で、私も思ふ存分療治することが出來ました』とて、大に信仰の力の偉大なるを感謝せらるゝを見受けたり。質素嚴肅、此の如き葬儀は未だ見ざる所なり。

福間氏が、生前厚き信仰の地に立てりしことは、本誌愛讀者の夙に領解せらるゝ所なるべし。己れの信賴する僧を請じて葬儀を行ひしこと、紫衣金襴の舊套を脱してすべて墨の衣に墨の

袈裟を用ひしこと、義理一片の參會者を拒非せしこと、是れ皆當代少しく心ある者の倶に爲さんと欲して爲す能はざる所、宜なる哉、某歴史家はこの葬儀に列して、眞正なる親鸞宗の儀式は茲處に複古せられたりと叫びしといふ。我等は讃じて模範的の葬儀と呼ぶに躊躇せず。若し今後、有識の信徒にして、相率ゐて此の如き葬儀を範とし、漸次舊來の惡弊を矯め、眞に心より出でたる吊悼の式を作成し、一見人をしてその嚴肅にして眞面目なる佛式葬儀たるを欽仰せしむるに至らば、始めて起居動作すべて佛化を助くるを得ん。

此稿は、知人の信仰の歴程を、備忘の爲に草して、筐底に秘めて置いたもので、今迄再三、其法味を分つやうにと、勸められたこともあつた。然し、獲信の實驗といふやうな事は、あまり他に向つて發表すべきもので無いといふやうな考へから、その儘にして置いたが、その後、諸方の信者から度々尋ねて來られるので、遂に上梓して、廣く有緣の人に頒つことゝしたのである。
本書の出版に就ては泉道雄、富士原純城、二氏が校正の勞を取られしを感謝す。

大正二年九月一日印刷
大正二年九月五日發行
（定價金八拾五錢）

著作者　菅瀨芳英

發行者　澤田友五郎
東京市五條通高倉東入
鹽竈町三百五十三番地

印刷者　須磨勘兵衛
京都市北小路西町西入
井筒町六百五十九番地

（弘文社印刷所印行）

實驗の信仰
不許複製

發行所　東京市小石川區久堅町七十四ノ五十三　同和學園
發行所　京都市五條高倉東入　振替大阪四五五六番　法文館
電話下二一九〇番

菅瀬芳英師謹輯　（第二版）

冠註　歎異鈔

正價　壹部　金拾錢
郵割引（五十部　金九拾錢）
税共（百部　金四圓七拾錢）

歎異鈔は親鸞聖人が絶他力の精神の固りであります本書は此の聖典を譯く有緣の人々に頒たんが爲めに讀み易く解し易き樣に編纂せられたる者で施本として一番に適當と信じます

總假名付　全文悉くふりかなを附す故に誰でも讀む事が出來ます

▲冠註和解　難解の文に註解を施こす故に如何なる人でも解する事が出來ます

▲句讀點付　全文に細かく句讀點を附す故にたやすく讀む事が出來ます

▲印刷鮮明　本文は四號活字を用ゆ故に文字が大きく老人でも讀む事が出來ます

▲製本優美　體裁美麗なり故に施本として氣が利いて上品であります

前田懸雲先生題字　近角常觀先生序
泉道雄先生叙傳　故菅瀬忠子夫人日誌

よろこびの跡

再定價　貳拾錢
郵税　貳錢
版十部以上割引

本書は、同和學園主菅瀬芳英師の夫人忠子氏の日記なり。夫人が生前一度絶對他力の信仰を得らるゝや、居常惱の駛雨罪惡の怒濤に翻はるゝ毎に、乃ち身の大悲願船に乘托せるを顯み、忽ち心中安住の地ひた思されたり。本書は、夫人が偽るなく飾るなき行住坐臥の信仰的感想を、日毎に誌し置かれたる唯一の遺書なれば、夫人と一味の信仰を味はんとするもの、殊に眞宗寺院の坊守には修養上無二の良書なり。

發行所　京都高倉五條東入　法文館

325
188

終